



窓●夢を実現するための「事務」と「冒険」—— 谷口祥一 664

こらむ図書館の自由●
9月世界アルツハイマー月間に思ったこと —— 伊沢ユキエ 667

●NEWS —— 665
告知板 … 666／新聞切抜帳 … 669

* * *

[特集] 高大連携における大学図書館の可能性

高大連携における大学図書館の教育的価値－高校生の研究支援に向けた
課題と展望 —— 小野永貴 670

高大接続において大学図書館職員に求められる役割とスキル－探究学習を
アカデミック・スキルに発展させる情報リテラシー教育 —— 梅澤貴典 674

高校の探究学習を促す大学図書館の理論的な枠組と支援の実際
—— 稲井達也・古川真理 677

筑波大学附属駒場中・高等学校の高大連携－探究学習をサポートする
大学図書館と、探究学習を協働・実践する大学 —— 加藤志保 680

学びの転換期に図書館はどう立ち会うか－中学生が「卒業論文」を書く
探究学習の現場から —— 山崎勇気 683

専修大学図書館における高校生を対象とした司書インターンシップ
の取り組み —— 窪田 藍 686

* * *

日本図書館協会学校図書館部会第53回夏季研究集会東京大会●
学校図書館の今とこれから－あるべき姿を探る —— 高橋恵美子 689

日本図書館協会学校図書館部会第53回夏季研究集会東京大会に参加
して —— 村上 民 693

霞が関だより●第264回
令和7年度新任図書館長研修 —— 文部科学省 694

●編集委員会

〈委員長〉
松本哲郎（市原市立中央図書館）

〈委員〉
青柳英治（明治大学文学部）
岩永知子（相模原市議会局）
宇野亮一（国立国会図書館）
中村保彦（元文教大学図書館）
長谷川優子（元埼玉県立図書館）
宮原柔太郎（日本体育大学図書館）
米山 薫（多摩市立図書館）
鷺山香織（福井県立図書館）

*

●事務局スタッフ

秦 秀文・川下美佐子・星川智隆

●今月の表紙

東京学芸大学附属図書館所蔵
「おもちゃの勝負：子供あそび」（部分）
山本昇雲画
1906（明治39）年-1907（明治40）年
〈東京学芸大学教育コンテンツアーカイブ〉



図書館で実践！SDGs●第11回／豊島区立図書館

誰ひとり読書から取り残さない図書館サービスを目指して－豊島区立
図書館の「りんごのたな」の取り組み ————— 石川典子 697

れふあれんず三題噺●連載その三百二十四／南アルプス市立図書館の巻

南アルプス市立図書館のレファレンス事例 ————— 望月静香 700

ウチの図書館お宝紹介！●第253回／大東文化大学60周年記念図書館

「中村屋のボース」との深い縁－『ラース・ビハーラー・ボース関連資料』
目録 ————— 大東文化大学60周年記念図書館 702

図書館員のおすすめ本●¹⁰⁰

現代「ますように」考 ————— 米田由紀子 704
「風の谷」という希望 ————— 星野 盾 704
学校に行かなかった僕が、あのころの自分に今なら言えること
————— 島田佳代子 705
大阪ことばの謎 ————— 城内 涼 705

図書館員の本棚●

図書館と居場所 ————— 舟越瑞枝 706
図書館にゲームを！ ————— 菅野梨夏 707

* * *

● *The Library Journal, November 2025*

Special feature: Potential tie-ins between high schools and universities

*The educational value of university libraries in high school-university tie-ins –
The challenges of and prospects for supporting research by high school students*
(ONO Haruki) 670

*The roles and skills expected of university librarians in high school-university
tie-ins – Information literacy education for developing academic skills from
inquiry-based learning* (UMEZAWA Takanori) 674

*Theoretical frameworks and support practices of university libraries in promoting
inquiry-based learning in high schools*
(INAI Tatsuya and FURUKAWA Mari) 677

*The high school-university tie-in at Junior & Senior High Schools at Komaba,
University of Tsukuba – University libraries supporting inquiry-based learning
and universities collaborating and practicing inquiry-based learning*
(KATO Shiho) 680

*The role of libraries at the turning point of learning – Inquiry-based learning
for junior high school students writing a graduation thesis*
(YAMAZAKI Yuki) 683

*Librarian internship program for high school students at Senshu University
Library* (KUBOTA Ai) 686

● 編集手帳 ————— 712
事務局カレンダー 712

*「新館紹介」「小規模図書館奮戦記」「協会通信」は掲載させていただきました。

● 図書館雑誌12月号予告 ————— 711

● 発行者

公益社団法人日本図書館協会©2025
〒104-0033 東京都中央区新川11-11-14
電 話 (03)3523-0811 〈代表〉
直 通 (03)3523-0816 〈編集部〉
F A X (03)3523-0841 〈代表〉
〈日図協ホームページURL〉
<https://www.jla.or.jp>
〈JLA メールマガジン申込先アドレス〉
mailmaga@jla.or.jp

*本文は中性紙（冷水抽出 pH8.1）を使用



夢を実現するための「事務」と「冒険」

●
谷口祥一

事務とは何でしょうか。坂口恭平『生きのびるための事務』（マガジンハウス・二〇二五）とその同名の漫画化作品（道草晴子漫画・マガジンハウス・二〇二四）を読んだ。ここでの「事務」とは、われわれが通常想起する比較的定形化された事務的作業を超えて、「抽象的なイメージを数字や文字に置き換えて、具体的な値や計画として見える形にする技術」、つまり仕組みに近いものを指している。「好き」（＝夢）を見つけ、それを安定的に継続していくための仕組み化と言ってもよいであろう。「事務は冒険のための道具」とも表現されている。

彼の場合にはまさに「生きのびるため」という表現が適しているが、われわれ多くの場合には「よりよく生き抜くため」といったところであろうか。私のようにフルタイムの仕事から退いた者にとっては、自分の生活の大半をいかに事務化して、「好き」で実現したいことを、あるいはそれに向けて冒険を、不安なく継続していくかという話となる。

他方、本誌の読者の大半である現役世代にあっては、事務を駆使していかに組織目標（＝夢）を

達成するかという話になる。図書館は堅固な事務組織としての特性がビルトインされている。

しかし、場合によっては、仕事の大半がいわゆる事務作業に属し、そこでは好きや夢とはかけ離れて、事務が自己目的化し、業務に埋没している感覚にとらわれているケースもあるのではないかと思います。特に若い世代の人において。

そのような状況であっても、担当業務の範囲で自分の好きや夢に該当する部分を見つけ出し、継続しつつ最大化する（つまり冒険する）ことができるし、それが大いに必要とも考える。「私たちが考える才能は、ただ毎日続けるやり方を設定して実践さえすれば捏造できる」とも記されている。

ただし、この「やり方」には正誤がある。「上手くいかない人は、やり方が間違っているだけ」、「上手くいくとは、ただやり方が合っていたということだけ」とあるように、やり方には十分な配慮と検討が求められる。といっても、最後は直感というのが私の考え。

私などが言っても迫力も説得力もないことは自覚の上で、若い人に向けた声援としたい。

（たにぐち しょういち／慶應義塾大学名誉教授）

NEWS

▶「いつでも開いている学校図書館へー学校司書の配置等に関する提言」を公表

日本図書館協会は、9月18日(木)に「いつでも開いている学校図書館へー学校司書の配置等に関する提言」を公表した。

本提言は、学校図書館の実態に鑑み、「学校司書の配置・処遇等について(見解)」(日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員会・学校図書館部会 2025.9.14)などを参考として、広く国民、とりわけ児童・生徒の保護者、学校教育関係者、自治体教育委員会関係者等、並びに国会議員に向けて以下の提言を発信した。

○提言

1. すべての学校に、フルタイムで一校専任の学校司書を配置すること
2. 学校司書を学校教育に関わる職員の一員として処遇すること
3. 公的な研修を制度化するなど、学校司書の資質向上を保障すること
4. これらを可能とするため、学校司書の法的位置づけを明確にする学校図書館法の条文改正を行うこと

詳細：<https://www.jla.or.jp/2025/09/18/2025-09-18/>

▶2025年度第1回部会長・委員長会議を開催

2025年度第1回の部会長・委員長会議が9月17日(水)10:00-12:00にオンライン会議で開催され、今年度の全国図書館大会愛媛大会および今後の全国図書館大会の開催、今年度設置された部会・委員会のあり方検討委員会についての報告と意見交換が

なされた。

報告事項および意見交換のテーマは以下のとおり。

1. 2025-2026年度業務執行理事の役割分担について
2. 全国図書館大会について
 - ・第111回愛媛大会について
 - ・第112回石川大会について
 - ・2027年度以降の全国図書館大会の在り方、運営について
3. 部会・委員会のあり方検討委員会について
4. 2026年度事業計画・予算調書について
5. その他

▶第7回「図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議」開催

文部科学省は、2025年10月7日(火)に、第7回「図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議」を開催した。議題は、「今後の図書館・学校図書館に求められる人材の育成について」および「これからの図書館・学校図書館の運営の充実に向けて」報告書骨子案について」で、日本図書館協会から委員として参加している曾木専務理事が「公立図書館に求められる人材育成の現状と今後の充実に向けて」と題した発表を行った。司書・司書補に求められる資質、専門性、役割について述べ、司書・司書補の配置の充実に向けては、「法」の担保及び「予算」の担保が不可欠であることを訴えた。また、司書の養成・採用・配置や研修にかかる課題を提起し、今後は、公立図書館と学校図書館の連携がますます必要となることも述べた。最後に、日本図書館協会が9月18日に

公表した、「いつでも開いている学校図書館へー学校司書の配置等に関する提言」と非正規雇用職員に関する委員会と学校図書館部会が取りまとめた、「学校司書の配置・処遇等について(見解)」を紹介した。

会議も残す回数が少なくなってきたこともあり、有識者会議の報告書骨子案が提示され、図書館・学校図書館の運営の充実に向けた方策としては、「ICT・デジタル化への対応」、「読書バリアフリーの推進」、「生涯にわたる学びを支える読書環境の充実」、「図書館・学校図書館や書店、NPO法人等関係機関の連携・協働の促進」、「人材育成と専門性の向上」、「読書推進人材との連携協働」が挙げられている。今後の会議開催は、第8回が11月14日(金)、第9回が12月18日(木)に予定されている。

図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議(文部科学省)：
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/050/index.html

▶近畿大学中央図書館、アバターによるレファレンスサービスを開始

近畿大学中央図書館は、2025年10月14日(火)から、アバター技術を活用した受付窓口でのレファレンスサービスを開始した。中央図書館5階レファレンスデスクに設置され、図書館員がアバターを遠隔操作し、利用者からの相談に対応する。対面では相談しづらいと感じる利用者の心理的なハードルを下げ、多言語対応やテロップ表示による視覚的な支援も可能となり、外国人学生や体の不自由な人へのアクセシビリティの向上がはかれる。また、図書館員の

在宅勤務の拡充など、働き方改革への活用も検討されている。

アバターによるレファレンスサービスの開始について（近畿大学中央図書館）：https://www.clib.kindai.ac.jp/news/2025/1007-post_195.html

▶ IFLA 創立98周年、100周年記念へ向けてカウントダウン開始

2025年9月30日、IFLA（国際図書館連盟）は創立98周年を迎えた。1927年に15の図書館協会が集まって誕生したこのグローバルネットワークは、今や世界中の図書館界をつなぐ存在となっている。

来年、韓国・釜山で開催される世界図書館情報会議（WLIC）では、いよいよ100周年記念「IFLA100」がスタートする。IFLAの歴史を讃えるだけでなく、未来への飛躍の場としての企画が進行中である。

- ・歴史を振り返る記念書籍の制作や、アーカイブのデジタル公開
 - ・未来を見据えたイベントや新たなトレンドレポートの発表
 - ・地域・分野別の取り組みを通じたグローバルな参加型企画
- アイデア企画の募集もしている。

詳細・問合せ先：E-mail：ifla100@ifla.org

▶ 第45回（2025年）児童図書館員養成専門講座終了

第45回（2025年）児童図書館員養成専門講座が、前期は6月24日（火）～29日（日）、後期は9月24日（水）～10月3日（金）（9月27日は休み）の日程で、日本図書館協会研修室、東京子ども図書館、東京都立多摩図書館、国立国会図書館国際子ども図書館を会場に開講された。

修了生は以下の通り。飯田加奈（名古屋市山田図書館）、江藤志保（大分県立図書館）、鮫島真理（鎌倉市大船図書館）、正路瑞穂（練馬区立練馬図書館）、白仁田愛（鹿島市民図書館）、大工莉央（川越市立高階図書館）、戸張裕介（調布市立図書館染地分館）、中山菜摘（横浜市中央図書館）、西堀直美（栗東市立図書館）、馬場智子（成田市立図書館）、増井裕美（葛飾区立中央図書館）、森戸美貴（文京区立湯島図書館）、湯澤昌子（品川区立大井図書館）、吉野友紀（浦安市立中央図書館）、鷺山香織（福井県立図書館）、渡邊桂子（高知県立図書館（オーテピア高知図書館））（五十音順・敬称略）。受講生たちの今後の活躍を期待したい。

当講座は、2026年も開催する予定である。本誌綴込（2026年2月号を予定）および児童青少年委員会HPにて告知するので、そちらをご確認の上、お申し込みいただきたい。

告知板

●つどい

■資料保存委員会 映画上映会

映画『疎開した40万冊の図書』上映会＋談話

日時：12月22日（月）15:00-17:00

会場：日本図書館協会研修室

内容：太平洋戦争末期、東京都立日比谷図書館は、館の蔵書や民間から買い上げた図書を空襲から避難させるため奥多摩や埼玉の民家の土蔵へ疎開させました。この一大事業について記録したドキュメンタリー映画『疎開した40万冊の図書』（金高謙二監督・2013年公開・102

分）を鑑賞し、「資料を保存する」ということを改めて考えてみませんか。

上映後、元都立中央図書館資料保全専門員・眞野節雄氏より、当時の関係者のエピソードや全国の疎開・被災の状況などについてお話を伺います。

参加費：無料

定員：60名

申込方法：E-mailにて、件名を「1222 映画上映会申込」とし、①氏名（ふりがな）、②所属、③電話番号（緊急連絡先）を明記の上、下記の申込・問合せ先までお申し込みください。

申込開始：12月1日（月）12:00より（先着順・開始日時前の申込は無効）

申込・問合せ先：日本図書館協会資料保存委員会事務局・川下 E-mail：kawashita@jla.or.jp

■非正規雇用職員セミナー「変わるか 会計年度任用職員と公契約条例」

さまざまな問題を抱える会計年度任用職員制度ですが、昨年の総務省通知以後、雇用止めを廃止する自治体が多くみられるようになりました。また短時間正規公務員の採用を始めた自治体もあります。現在の状況について上林陽治さんからお話を伺います。また併せて拡がりを見せてきた公契約条例についても報告していただきます。

主催：非正規雇用職員に関する委員会

共催：図書館問題研究会

日時：12月15日（月）13:30-16:00

開催形式：会場およびZoom利用の

◆◆ NEWS ◆◆

オンラインによるハイブリッド開催

※申込者のみ後日配信の視聴が可能です。

会場：日本図書館協会研修室

内容：講演「会計年度任用職員と公契約条例」（上林陽治：立教大学コミュニティ福祉学部特任教授）

定員：会場=80名、オンライン=80名

参加費：500円（会場、オンラインとも）

申込先：<https://forms.gle/eaoCQ3BaAtS8hN2z9>から申込フォームにて

申込期限：12月5日（金）

問合先：日本図書館協会・星川 ☎
03-3523-0816 E-mail: kikaku@jla.or.jp

■認知症バリアフリー図書館特別検討チーム研修会

7万人を超える高齢者の長期追跡調査によって得られた最新の研究成果をもとに、自治体の図書館蔵書数が多いほど、地域の高齢者の要介護リスクが低いという関連性を明らかにして話題となった講師による講演会を開催します。講演会は、自治体や図書館関係者をはじめとする参加者が、図書館を「健康長寿のまちづくり」を推進するための重要な戦略的資源として再認識する機会とすることを目的とします。

テーマ：健康寿命の鍵は本棚にあったー高齢者と図書館の関係についてー

講師：佐藤豪竜（慶應義塾大学総合政策学部専任講師）

日時：12月4日（木）14:00-16:00

開催方法・定員：会場（日本図書館

こらむ 図書館の 自由

9月世界アルツハイマー月間に 思ったこと

伊沢ユキエ

敬老の日、横浜市役所のアトリウムで街の「認知症カフェ」の紹介イベントが開催されていた。地域で暮らす一人ひとりができることでつながる「まちかどケア」が広がっている。9月は世界アルツハイマー月間、9月21日は世界アルツハイマーデー、地元の図書館でも、区役所、地域ケアプラザ（横浜では地域包括支援センターの役割を持つ）との協働で認知症を知る展示が開かれていた。JLA 認知症バリアフリー図書館特別検討チームが集める事例も年ごとに増えている。メディアでも認知症を解説する特集が多く、このひと月、学ぶ機会が多かった。社会的にも認知症への理解が進んでいることを実感する。

上記認知症チームがかかわった『認知症バリアフリー社会実現のための手引き・図書館編』（日本認知症官民協議会 2023）は参考になる。高齢者にもなじみの場である図書館では、病気に関する一般的な啓蒙・対策の他、関連機関との連携で役割を果たすことができるとある。しかし、地域一体となって取り組む時にプライバシーはどのようにあつかわれるのだろうか。

読書の秘密とどう折り合いをつけるかも課題である。最近もある図書館から「督促状が来たが、本人が認知症で借りた本がわからない、教えてもらえれば弁償したい」という家族からの問い合わせにどう対応したら良いだろうか」と相談があった。電話で「本人が認知症で」と言われても診断書を見ているわけでもないから、お断りするのが原則的な対応となろう。本人の尊厳もある。では、診断書があればよいのか、後見人からの問い合わせならよいのか。責任能力の有無を判定されることがひとつのラインではないだろうか。

ノルウェー公共図書館法は、「ここは図書館だよ。なんでおしゃべりをしないの？（吉田右子さん超訳）」と主張しているそうだ。移民カフェが開かれ地域の人とお茶やお菓子をつまみながら言葉の勉強をし、日常生活情報を得ているという。日本でも最近是多様な機能が融合する図書館が育ちつつある。冒頭のような「認知症カフェ」が常設されれば、だれでも日常的に身近な場所でいつも専門家に相談できるという安心感がある。図書館員も役割を受け持つ中で橋渡しの方法やプライバシーの問題も解決できるかもしれない。

（いざわ ゆきえ：JLA 図書館の自由委員会）

協会研修室) 60名およびオンライン (Zoom) 80名

対象：図書館員， 地方自治体職員 (健康・福祉・まちづくり関係ほか)， 研究者， 図書館に関心のある方

参加費：無料

申込方法：認知症バリアフリー図書館特別検討チームのページの申込みフォームからお申込みください。
<https://www.jla.or.jp/committees/ninchisho/>

申込締切：12月1日(月)

※ただし定員に達し次第締め切ります。

●その他

◆日本図書館協会資料保存委員会『ネットワーク資料保存』No.140を掲載

内容は以下のとおり。

- ・気候変動問題と図書館・文書館資料の保存環境管理－持続可能性をめぐる－ (竹内秀樹)
- ・2023年度都道府県立図書館の「県」域内市町村立図書館への図書資料の保存の取組－図書館ホームページから 下－新中央図書館計画のある「県」－ (鬼倉正敏)
- ・「書き込み式図書館資料保存の基本：資料をより永く利用するために」2025年度版について (小島浩之)
- ・三康図書館の「環境管理」－三康図書館見学記 (堀純子)
- ・資料紹介『近代製本の100年 明治・大正・昭和』(書物学 第27巻) (鞭馬裕次郎)

『ネットワーク資料保存』No.140 : <https://www.jla.or.jp/wp/wp-conte>

[nt/uploads/2025/09/NW140.pdf](https://www.jla.or.jp/uploads/2025/09/NW140.pdf)
資料保存委員会のページ：<https://www.jla.or.jp/hozon/>

◆2026-2029年度代議員 (個人会員選出及び団体会員選出) 選挙

公益社団法人日本図書館協会選挙管理委員会より， 9月22日付で個人会員選出および団体会員選出代議員選挙について公示がなされました。

投票期間は2026年2月2日(月)～2月16日(月)までとなっています (立候補および推薦の届け出はすでに終了)。投票用紙は2026年1月中旬に個人会員に直接郵送します。

詳細は，代議員選挙のページをご覧ください。

<https://www.jla.or.jp/senkyo/>
会員の皆様の参加・協力をよろしくお願いいたします。

お詫びと訂正

『図書館雑誌』8月号に掲載しました「2025-2026年度委員会委員名簿」に誤りがありました。深くお詫びすると共に，下記の通り，差し替えおよび追加いたします。

<差し替え>

6. 障害者サービス委員会

*杉田 正幸 (新) 国立国会図書館
【関東】

*返田 玲子 調布市立中央図書館
石出 恵 (社福) 日本点字図書館総務課長

大川 和彦 千葉市中央図書館
河村 宏 支援技術開発機構
佐藤 聖一 明治大学文学部兼任講師

椎原 綾子 目黒区立八雲中央図書館

富澤 亨子 筑波大学附属視覚特別支援学校

野口 武悟 専修大学文学部

野村美佐子 日本DAISYコンソーシアム

松井 進 千葉県立中央図書館

松戸 宏子 佛教大学教育学部

村井 優夫 東京都立中央図書館サービス部情報サービス課視覚障害者サービス担当

渡辺 修 聴覚障害者ワーキンググループ

【関西】

*小原亜実子 大阪府立中之島図書館

杉田 正幸 国立国会図書館

西村 浩生 全国視覚障害者情報提供施設協会サビエ事務局

野原 要子 神戸大学附属図書館情報サービス課

原田 敦史 堺市立健康福祉プラザ視覚・聴覚障害者センター

東 泰江 大阪市立中央図書館

松延 秀一

的場 涼平 京都ライトハウス情報ステーション

村林 麻紀 八尾市立八尾図書館 (社福) 日本ライトハウス情報文化センター サービス部図書情報係

<追加>

2. 著作権委員会

*平井利依子 ログス点字図書館

16-2. 図書館調査事業委員会 日本
の図書館調査委員会

小池 信彦 調布市立図書館

NEWS

新聞切抜帳

●全国

▶劇団民藝公演 「聴衆0の講演会」
図書館制度に尽力した中井正一
(しんぶん赤旗9/28)

●関東

▶幻想的な絵本原画 認知症でも次々 竹川功三郎さん 八王子[市]の
[中央]図書館で個展 [[タケカワコウ原画展]] (朝日<多摩>9/4)

●甲信越・北陸

○怖い絵本紹介 きもだめしも 昭和町立図書館 [[夜のおはなし会ときもだめし会]] 山梨県
(山梨日日8/9)

▶夏休みの読書でポイントゲット 笛吹[市]・図書館企画 [[図書館deゲット]] (毎日8/16)

▶講座や祭り 夏の思い出に 紙すき「トトロ」 筑北[村]の図書館で体験 [長野県]
(市民タイムス<東筑・北安>8/8)

▶本で昭和を振り返ろう 大桑村図書館が企画展 [長野県]
(市民タイムス<木曾>8/9)

▶アナログの遊びを楽しむ 夜の図書館でボードゲーム [[ナイトライブラリー] 箕輪町図書館 長野県]
(みのわ8/9)

▶館長の“珍ペット”観察, 生態学ぶ [伊那市立]伊那図書館
(長野日報8/20)

●東海

▶[ニュースを問う]公共図書館で新聞と雑誌廃止 「情報得る場」守る工夫を 財政改革の一環で 購入助ける仕組みも [郡上市図書館 新聞

は本館, はちまん分館に設置]

(中日8/24)

▶イオン[グループ]「発祥の地」へ恩返し寄付 四日市市の新図書館計画に10億円 (中日9/13)

●関西

▶本との出会い運んで60年 彦根[市]の移動図書館[[たちばな号]] 市内全域にサービス (読売9/20夕)
▶芥川賞作家松永[K三蔵]さん講演会 本の面白さテーマに語る 伊丹[市立図書館]・ことば蔵で来月28日 (神戸<阪神>8/10)

▶世界を旅し着想 絵本3作[[「たこなんかじゃないよ』『とうもろこしおばあさん』『たいようまでのぼったコンドル]]原画展 おおらかで豊かな精神性伝える 画家・アキノイサムさん 晩年過ごした[兵庫県]上郡[町]などで20日から巡回展 [宍粟市立図書館, たつの市立新宮図書館など] (神戸<西播>8/17)

▶科学のふしぎ手作り絵本に「かさぶた」「時計」題材に加古川東高[校]生 [兵庫県]県立図書館で23日披露 「子どもの好奇心刺激したい」 [[かがく絵本]] (神戸<明石>8/17)

▶[神戸[市]]・鈴蘭台 北図書館新聞]ゆる〜い読書会46年超 主婦の発案でスタート, 500回到達 内容自由, 会費・名簿なし 時には脱線, 皆が笑顔に [神戸市立北図書館] (神戸8/19)

▶[戦後80年 ひょうご]「建物疎開」[兵庫県]県内3万1千戸超 強制撤去戦局悪化で地方に急拡大 米軍保管文書で判明 研究者「戦時の強権性グロテスクに現れる」 神戸[市]の[[「神戸市」疎開[空地・焼失区域並戦災]地図]] [兵庫県]県立図書館に (神戸8/20)

●中国・四国

▶島根水道が65万円寄贈 [島根]県教[育]委[員会]に図書購入費 [島根県立図書館に配置]

(山陰中央新報8/19)

▶本借り「ガチャ」回して 雲南[市立]6図書施設[図書館・図書室] シールラリー 「夏休み楽しく利用を」 [[「うんなんガチャガチャシールラリー]] (山陰中央新報8/19)

▶美馬市の古い写真をネット公開 市立図書館のアーカイブ運用5年 市民ら協力掲載4倍増 小中学校で教材活用も [[美馬の記憶デジタルアーカイブ]] (徳島8/18)

▶阿南市, 新図書館に集約計画 「那賀川」「羽ノ浦」存続を 市民有志, [羽ノ浦図書館・那賀川図書館を]守る会設立へ 事業債発行には施設集約が要件 (徳島8/29)

●九州・沖縄

▶読書の楽しさ広めよう 生徒有志のアイデアを形に [久山町立]久山中[学校]図書館リニューアル 3年がかりゆったりカフェ風に 不定期で開放 [福岡県] (毎日8/2)

▶[商業施設]ミーナ天神で本返却可能に[専用ポストを設置] きょうから 福岡市総合図書館 (毎日8/8)

▶学校に複数新聞 広がる「視点」 熊本[県]・玉名[市]の小学校導入 児童ら「違い」学ぶ 市教[育]委[員会]一括契約で負担も減 [玉名市立玉水小学校 葛飾区, 横浜市などでも取り入れ] (読売8/20)

今月も石井一郎様, 鎌田梨奈様, 梅野みな様, 松野高徳様および山梨県立図書館, 県立長野図書館, 小郡市立図書館の皆様より記事の提供を受けました。ありがとうございました。

高大連携における大学図書館の教育的価値

——高校生の研究支援に向けた課題と展望——

小野永貴

1. はじめに

2018年に告示された現行の高等学校学習指導要領¹⁾では、「総合的な学習の時間」の名称が「総合的な探究の時間」へ変更されたことを筆頭として、多くの教科で探究的な学びが全面的に導入された。これにより、従来はスーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）や研究開発学校など限られた学校で推進されてきた探究学習が、全国各地の多くの高等学校で展開されるようになった。高等学校学習指導要領においては、探究的な学習の過程が、①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現の4段階で示されている。そして、学習指導要領では、総合的な探究の時間における内容の取り扱いにあたって、「学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などの工夫を行うこと。」と明確に示している。読書センター・情報センター・学習センターを追求してきた学校図書館においては、②の情報の収集の段階はもちろんのこと、いずれの段階においても教育的価値を発揮できる可能性を有しており、探究学習の核として機能することが期待される。

一方で、探究学習にはさまざまな形態があり得るが、一部の学校においては「研究」の名を冠した活動が行われるようになった。この点は、高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編²⁾で

も当初から想定されており、「高等学校の総合的な探究の時間においては、生徒の興味・関心等に基づき、高度で専門的な研究活動が行われることも十分に考えられる。その場合には、高等学校の生徒が大学を訪問したり、大学の教員や大学生、大学院生などの指導を受けて研究を行ったりするなど、高大連携を図ることも効果的であると考えられる。」という記述が存在する。探究学習の基盤となる情報資源を高校生に提供する学校図書館も、大学図書館との高大連携を意識する必要があることは、自ずと導き出される。しかし、従来の図書館分野では、学校図書館と公共図書館の連携事例は兼ねてより多数存在していたが、学校図書館と大学図書館の連携に関する事例報告や研究発表は、日本国内では非常に少ない状態が続いていた。これまで、学校図書館と大学図書館は異なる館種と捉えられ、利用者の発達段階としては連続している館種であるにも関わらず、人的交流や情報交換は盛んではなく、断絶があったと言っても過言ではない。現行の高等学校学習指導要領に基づく教育が開始されてから3年が経過したが、この問題は今でも十分に解消していない。既に次期学習指導要領改訂に向けた議論³⁾が進んでいる今、図書館分野はこの問題に真正面から向き合う必要がある。

2. 研究を行う高校生の存在

筆者は、図書館の高大連携について、10年間以上にわたって研究および実践を行ってきたが⁴⁾、当初は高大連携の必要性に対して多くの賛同を得られたわけではなかった。初期の頃は、「高校生が本当に研究など行うのか?」「高校生が大学図書館レベルの資料を読めるのか?公共図書館との連携で十分ではないか?」といった懐疑的な意見を頂いただけでなく、「高校生が大学図書館を使うと、主たる利用者である大学生の妨げになる」という懸念の声を受けたこともある。たしかに、探究学習が全国的に普及していたわけではない当時においては、高校生が学術資料を用いて研究を行う姿は想像しづらく、そのような生徒は稀有で突出した存在に見受けられたことは自然である。また、当時は全国の大学図書館にラーニングコモンズが急速に普及していった時代とも重なり、新設した学習空間が意図せず高校生により独占される事態を危惧することも、やむを得ないものだったといえる。

しかし、今や全く違う状況にあることは、明らかだろう。近年、高校生の発表や参加を歓迎する学会・研究会も多数見られるようになり、実際に全国各地の高校生が学会・研究会で発表している実態が確認できる。例えば、日本水産学会や日本分子生物学会、日本金属学会などの学会は、高校生が発表可能なセッションを継続的に実施していることが記録されている。また、情報処理学会や日本物理学会などの学会は、中学生まで含めて応募可能な形で開催している（これらの形態は、ジュニアセッションなどと呼ばれる）。さらに、いわゆるSTEM分野の学会のみならず、医学・薬学分野の学会においても高校生を対象とした特別セッションが開催されている事例が確認されており、高校生の参画を歓迎する動向が多様な分野に存在することがわかる。

このような高度な研究が行われうる状況において、いかにして高校生が研究に必要なリソースへアクセスできるよう支援するかということは、重

要な課題となる。筆者は過去に、探究学習に取り組む高校生が執筆した論文の参考文献欄を調査し、どのような文献が用いられているかを分析したことがある⁵⁾。2020年時点での限定的な調査結果としては、多くの論文はインターネット上の無償情報源のみに依拠して書かれていたものの、一部には学術論文や大学図書館レベルの専門図書が用いられている事実が明らかになっている。また、直近においても学会のジュニアセッションを何度か現地見学に伺っているが、一部の高校生の発表では、英語の学術文献や外国の専門資料を組み合わせ書かれたものも存在した。

従来は、このような高度な専門資料に対するニーズは特異な存在と捉えられ、学校図書館がアクセスを保障すべき資料として重視されてこなかった。しかし、探究学習が学習指導要領における標準的な教育課程の一部となった現在、学校図書館の所蔵資料の範囲が生徒の探究課題の限界となることは望ましくない。学校図書館が高度な資料へのアクセスを保障しなければ、自費で専門資料や学術文献を購入できる生徒のみが高度な探究に到達できることとなり、家庭の経済格差が探究成果に反映される事態を招きかねない。学習指導要領に定められた教育課程の一環として行われる探究学習において、学校や家庭によって格差が生じることは避けるべきであり、探究に要する高度な資料に対する均質なアクセスを保障する拠点として、学校図書館は機能することが望まれる。

一方で、学校図書館の図書購入費の状況は、全国学校図書館協議会の調査結果⁶⁾によると、2023年度決算において高等学校平均79.3万円となっている。直近10年間の動向を見ても、予算が増加している傾向にはなく、探究学習が本格化した現行学習指導要領開始後の年度においても大きな変化はない。この金額は、大学図書館の予算額とは正に桁違いであり、学術資料を整備する予算としては完全に不足する状態である。教育の高度化に対して環境整備が全く追いついていない現状であり、このギャップを補完する枠組みとして、図書館の

高大連携には強い可能性が期待される。

3. 図書館が高大連携を行うことの価値

前述の通り、図書館の高大連携は、高校で行われる探究学習の基盤として、高い価値を有する。一方で、図書館が高大連携を行う価値はそれだけではない。

筆者らは、高校時代に大学図書館を利用可能であった高校の卒業生らに、インタビュー調査を行った⁷⁾⁸⁾。調査協力者は、高校卒業後数年が経過し、大学卒業を経て、社会人もしくは大学院生となった方々である。この調査では、高校時代から現在に至るまでの情報利用に関する記憶を、回顧的に聞き取った。その結果、高校時代に大学図書館を利用可能であった方々は、大学図書館の特徴を早期に把握し、学校図書館や公共図書館も組み合わせ、情報の入手先を意識的に使い分けようになるプロセスの存在が導出された。そのうえ、大学入学後に新たな情報源を自ら発見し、就職後も国立国会図書館など他の高度な図書館の利用に至るプロセスも確認された。このように、図書館が高大連携を行うことは、高校生に対する長期的な成長を促す効果もあり、ひいては大学入学時点での情報リテラシー底上げにもつながることから、大学図書館側にとってもメリットがある可能性が示されている。

また、逆の見方をすれば、高校時代に不適切な研究習慣を身につけてしまうことを抑止するという点でも、図書館の高大連携には意味がある。前項で示した高校生の研究論文や、学会ジュニアセッションでの発表内容においては、参考文献が一切記載されていないものや、表記方法に重大な問題があるものも複数確認された⁹⁾。このような、研究倫理的に問題のある成果物を発表しても“問題なかった／学会で発表できた”という成功体験を得てしまうと、大学入学後も同様の問題を抱えた状態で、レポート執筆や卒業研究にあたってしまふ危険性がある。大学図書館と連携し、アカデミックスキル育成の視点を取り入れたガイダンス

や協働授業を行うことができれば、高校段階から学術文献の適切な取り扱いに対する姿勢を確立できる可能性がある。これは、大学図書館にとっても、将来的な大学生の研究不正防止に資する意義がある。

その他、長期休暇期間における自習場所としての空間開放や、オープンキャンパス・学園祭等での見学案内およびイベント実施、大学広報および志願者獲得の意義を重視して行われる事例も多々確認されている。職業体験や図書委員会生徒の研修など、キャリア教育を支援する役割を果たす事例もある。大学図書館の市民開放の一環で、高校生も利用対象者に含まれている事例もあり、地域貢献・社会貢献としての意義も存在する¹⁰⁾。いずれにしても、図書館の高大連携は、高校側が一方的に恩恵を受けるものではなく、高校と大学の双方にとって利益のある枠組みといえる。ただし、その利益を短期的な指標のみで測らず、長期的なアウトカムも含めて捉えることが肝要である。

4. おわりに：課題と展望

本稿では、高校教育における探究学習基盤としての側面に焦点化して、図書館が高大連携を行うことの必要性や価値について述べてきた。しかし、現実的な波及を考えると、多々の運用上の課題にも向き合う必要がある。

例えば、高校生を大学図書館の空間へ入館させ、資料を貸出可能とする場合、入退館ゲートの通過や貸出処理に係るカードの取り扱いを検討する必要がある。また、館内のPCや図書館システムの機能を利用可能とする場合、大学の情報システムのアカウントを高校生向けにも用意する必要が生じる場合がある。また、冒頭で取り上げた、空間混雑への懸念や、利用資料重複による大学生への不利益なども、考慮しなくてはならない。高校生が利用可能な期間・時間および貸出冊数や資料範囲等のポリシー策定や、大学図書館の特性や留意点に関する事前指導の実施など、懸念を払拭する対応の検討が必要である。さらに、一部にはILL

や電子リソースの面で連携している学校もあり、資料送付の方法や費用負担等の観点での議論も必要となる。

筆者は、過去に大学附属の高校で教諭を務めており、図書館高大連携の実務を担ったことがあるが、高校生の身分証明書をICカード化して大学図書館のゲートで共通利用できるようにし、さらに高校入学時に大学の情報システムのアカウントも一律で発行されるよう、全面的な連携体制を構築した。さらに、生徒のニーズ調査を行いつつ、高校1年次に大学図書館を直接訪問して利用ガイダンスを受ける授業も開始し、大学図書館と学校図書館の円滑な使い分けを促進する教育体制の構築に努めた¹¹⁾。この実現には、高校内での関係校務分掌の先生方との議論および管理職との合意形成、学校司書の多大なる実務的貢献、そして大学図書館および大学の情報基盤センターとの度重なる協議と交渉の道のりを経たことは、言うに及ばない。高大連携体制の構築は決して容易なものではなく、体制の在り方は高校と大学の事情により千差万別であると予測される。より多くの連携事例の知見が共有されることで、新たに高大連携を模索する図書館のロールモデルとなる事例情報が増加することが望まれる。

最後に、既に前述の通り、一部の学会は高校生のみならず、中学生も歓迎するジュニアセッションを行っている。さらに、情報処理学会は「IPJS KIDS」¹²⁾と称して、既に“小学生以下の研究者”を対象としたセッションを開始している。よって、この話題は本質的には高校と大学だけの連携に留まる話ではない。学習指導要領で定められた既存の教科や学年の枠組みを超えた学びを望む生徒に対し、学習に必要な情報資源をいかに連続的に提供し続けるか、という普遍的な課題である。この課題解決には、学校図書館・大学図書館という館種の壁を超えた統合的議論が必要である。本稿は部分的な側面に焦点化した論考であるが、これを契機とし、「可能性」に留まらず「現実性」をもつ課題として高大連携の議論が活性化することを期

待したい。

謝辞

本稿は、科学研究費助成事業（研究課題番号17K12796および25K03417）の一環として実施した研究成果に基づき執筆した。

注

- 1) 文部科学省. 高等学校学習指導要領（平成30年告示）. 東山書房, 2019, 602p.
- 2) 文部科学省. 高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探究の時間編. 学校図書, 2019, 185p.
- 3) 中央教育審議会教育課程企画特別部会. “教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）”. 文部科学省. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/mext_00010.html. (参照 2025-10-10).
- 4) 小野永貴. 高校生の学習情報資源の利用実態を通した図書館の高大連携の役割に関する研究. 筑波大学, 2021, 博士論文.
- 5) 小野永貴, 宇陀則彦. 高大連携における大学図書館の利用可能性：スーパーグローバルハイスクール校での課題研究における文献利用実態. 図書館情報メディア研究, 2020, vol.18, no.1, p.25-34.
- 6) 全国学校図書館協議会. “「学校図書館調査」の結果”. <https://www.js-la.or.jp/material/research/gakutotyousa.html>. (参照 2025-10-10).
- 7) Haruki Ono. “The value and issues of opening university libraries to high school students: Based on a survey investigating the processes by which Japanese high school students use university libraries”. 2021 10th International Congress on Advanced Applied Informatics (IIAI-AAI). 2021, p.41-46.
- 8) Haruki Ono. “Changes in the thinking and behavior of high school students gaining university library access: Effects of high school-university collaboration to learn using university libraries”. 2021 10th International Congress on Advanced Applied Informatics (IIAI-AAI). 2021, p.261-268.
- 9) 三笠佑野, 小野永貴. 高校生の論文における参考文献表記の実態. 日本教育工学会 2025年秋季全国大会 講演論文集, 2025, p.185-186.
- 10) これらの多様な高大連携の役割は、下記の文献にて包括的に報告されている。
蒲生英博, 瀬戸有希子, 杉浦未布子, 寄本真里, 阿部由貴. 高大連携における大学図書館の役割. 大学図書館研究, 2020, vol.116, p.2071-1-2017-14.
- 11) 小野永貴, 徳光亜矢子. 図書館の「連携」と「使い分け」に着目した、国立学校の学校図書館向上への試み：平成24年度「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」を通して. お茶の水女子大学附属高等学校 研究紀要, 2013, no.58, p.47-62.
- 12) 情報処理学会. “IPJS KIDS・おしえて！小学生先生”. 情報処理学会第86回全国大会. <https://www.ipsj.or.jp/event/taikai/86/WEB/html/event/B-1.html>. (参照 2025-10-10).

(おの はるき：筑波大学図書館情報メディア系)

[NDC10：017

BSH：1. 大学図書館 2. 学校図書館 3. 探究学習]

★ 特集◎高大連携における大学図書館の可能性 ★

高大接続において大学図書館職員に求められる役割とスキル

——探究学習をアカデミック・スキルに発展させる情報リテラシー教育——

梅澤貴典

1. はじめに

高等学校においては、2022年度に改訂された新学習指導要領のもと「総合的な探求の時間」が始まり、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業」として、探究学習が必修化された。文部科学省によれば「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学びを展開していくこと」が重視されている¹⁾。

課題解決型の学びは一般的に、大学における研究と同じく「1. 課題を発見する」に続いて「2. 調べる」、「3. 考察する」、「4. まとめる」、「5. 表現する（論文や口頭発表）」という順に進められる。それを通じて「課題を発見し、必要な情報を収集して、解決策を提言できる力」（以下、本稿では「探究力」と呼ぶ。）が育つ。以前から探求学習に取り組んできた高等学校では高いレベルでの実施ができて一方、そうではない高等学校との間に格差が生じ、ますます広がっている。

また大学では、探究力を評価する総合型選抜も増えており、探究学習の成否は、まさに将来を左右する要因ともなり得る。例えば、お茶の水女子大学の総合型選抜「新フンボルト入試」は、文系では「図書館入試」をおこなう。それは「課題を提示し、本学の図書館所蔵資料を自由に使って関連する情報を集め、それらを組み立て、オリジナルな答えを導き出すという試験」である。このように、正確な知識の多寡のみならず、図書館活用のような学術的な情報収集の能力や、思考力・表現力を問う入試も増えている²⁾。まさに探究学習は、そのような力を育てる機会となる。

また大学進学後も、探求力の高い学生は、最初のレポートから評価が高くなる。その先にある卒業論文はもとより、就職活動時のエントリーシートも、自己分析や志望理由のプレゼンテーションも、さらには就職後に書く企画書も、オリジナリティと論拠を併せ持った内容となる。つまり、小学校から高等学校までの探究学習でどれほどの支

援を受けて成長できたかは、将来にわたって強い影響を与え続ける。

しかしながら、文部科学省によって探究学習が必修化されていながら、「正答のない問い」への取り組みを「誰が」「どのように」支援するかについては、必ずしも具体的には示されていない（先述の文部科学省資料においても、学校図書館や司書教諭・学校司書の役割は、主に情報収集支援の文脈で触れられているのみ）。そのため、各自自治体の教育委員会や各高等学校の現場においては、研修などそれぞれ独自の工夫と試行錯誤が重ねられているのが現状である。したがって、高等学校間や生徒間での差は大きくなり、大学入学後に初めてのレポートでつまづく新入生も多い。

いっぽう大学では、多くの図書館において「初めてのレポート執筆に悩む新入生の支援」などをおこなっており、それを通じて探究力育成の支援スキルと経験を持つ職員も多い。本稿では、大学図書館職員が高等学校における探究学習の支援をおこなうことによって、課題の発見や解決策のアイデアを導き出すための材料となる「確かな情報探し」に必要な知識・技能を教えることに加え、その先にある研究の面白さに気づかせて能動的な学びに向かわせ、スムーズな高大接続に貢献することを提言する。

2. 高等学校における探究学習支援の問題点

筆者は、大学図書館司書の経験から、これまで多くの県や自治体の教育委員会からの依頼を受け、主に高等学校における探究学習を、図書館と司書がどのように支援するかについて、講演やワークショップを担当してきた。毎回、受講者（司書教諭や学校司書など、探究学習の支援者）に自由記述コメントを依頼して、指導上の悩みを尋ねている。大別すると、主として以下5項目の課題が挙げられる。

(1) ネット情報の扱い

1人1台タブレットが配付されたことにより、「調べる＝ネット検索」となってしまう、探究学習は事実上「検索結果の上位に表示された情報を体裁よくまとめて発表すること」になってしまっていることに、違和感や罪悪感がある。

(2) 情報の真偽の見極め方

さまざまな媒体が発信したり、生成AIが出力する情報について、その真偽や信頼性の評価が難しく、取り扱いの指標や基準を示せない。

(3) アウトプット（学術的レポートの作法、著作権、生成AIの出力物の扱い）

学術的な研究手法について研修を受ける機会がなく、また指針も示されていないため、テーマ設定（問いの立て方）や考察の進め方、成果物のまとめ方が分からない。他者の著作物を引用する際のルールが説明できない。特に、生成AIの出力する情報をどのように扱うべきか分からない。

(4) 図書館離れ

図書館の利点が説明できず、利用を強く推奨できない。学校図書館は蔵書数も少なく、本には古い情報が載っている場合もあるため、ネットも使わざるを得ない。一部の教員も含めて、そもそも紙資料から学ぶ習慣がない。このため、授業との連携もできていない。

(5) 探究学習の在り方と位置づけ

探究学習に否定的な生徒に、貴重な時間を費やして挑むことの意義を説明できない。

以上のような課題を解決するために、大学図書館職員がどのような貢献ができるかを考えたい。

3. 大学における導入教育と、大学図書館職員が果たしてきた役割

高等学校における5項目の課題については、大学においても「ネットと生成AI時代の導入教育」における重要な課題であり、すでに多くの取り組みがおこなわれてきた。その中で図書館職員は（大学間で差はあるものの）情報に関する知識と経験で解決に貢献してきた実績がある。例えば新入生向けの図書館ガイダンスで「調べる」ための基礎知識・技能の講習を通じて「情報の価値基準や信頼性の評価方法」を教えている図書館職員は多く、大学によっては基礎ゼミの最初の1コマを図書館職員が担当し、教員とともに「初めてのレポート執筆」をサポートすることにより「集めた情報を

材料に考察する方法」や「その成果を文章や口頭発表で発信する方法とルール」について教える場合もある。さらには大学院生向けに研究室のテーマに応じたデータベースの活用法を教えるオーダーメイド型の講習をする例もある。このような知識とスキルを持つ大学図書館職員であれば、その経験を高等学校における探究学習支援に応用することによって、課題解決能力の底上げに貢献できる可能性がある。

4. 高大接続において大学図書館職員に期待される支援

高等学校における五つの課題に関し、大学図書館職員による解決策として、具体的には以下のような方法が考えられる。

(1) 高校生向けの出前授業（大学1年生に向けた「初めてのレポートの執筆支援講座」を高校生向けにアレンジし、図書館とデータベースによる情報収集法、レポートの書き方やルールを教える。）（すべての高等学校・生徒向け）

(2) 「教員によるミニレクチャー」（研究分野のアピール）＋その課題解決に特化した大学図書館職員による情報収集の演習（理工系など特定分野別クラスや、農工商などの専門高校向け）

(3) 上記内容のオープンキャンパスにおける実施
このような支援の実施は、高等学校にとって支援になることはもちろん、大学側にとっても、さまざまなメリットが考えられる。

5. 高校側のメリット

高等学校にとっては、このような支援を受けて大学における新入生向け指導の実例を知ることにより、先述の5項目の課題について、解決のヒントが得られるメリットがある。具体的には、以下のような点が参考になると考えられる。

(1) 大学におけるネット情報の取り扱い（有料契約データベースや公的サイトの情報と、無料の表層ウェブ情報の違い）

(2) 情報の真偽の見極め方（事典や書籍、査読付き論文誌の特性と価値、基礎教養で知識基盤を築くこと）

(3) アウトプットの方法（レポート執筆上の作法とルール、引用の表記法、大学における生成AIの取り扱い）

(4) 大学における図書館の位置づけと司書の役割、授業との連携状況（大学4年間のカリキュラムの中で、導入教育から卒業研究にいたるまでに、図書館と司

書がどのように携わっているか)

(5) 探究学習で培った能力は、大学入学後に特定のテーマを研究する上でこそ必要となり、さらに社会も探究力ある人材を求めていること

これらの点を学び取って高等学校での支援に応用すれば、探究学習における図書館を活用した情報収集の必要性や方法について、分かりやすく教えられる。また、生徒には「探究学習は高校時代の貴重な時間を費やして単発的に終わるものではなく、自身の将来と地続きであり、大学における研究手法に則って真剣に取り組めば、確かな探究力が早期に育つこと」を自覚させることができ、能動的に取り組むための後押しにもなるだろう。

6. 大学側のメリット

大学にとっては、高校生に向けて自校の多様な学問分野を知らしめる機会となり、きめ細やかな教育研究支援のアピールにもなる。また、探究力を鍛えた高校生を歓迎していることや、大学がそれを伸ばして社会に送り出す人材像を示すことによって「ここで学びたい」という意思を醸成できる。

さらに、単一の大学ではなく、国公立大学の図書館協会などを中心とした横断的・組織的な取り組みによって日本全体の高校生の探究力が底上げされれば、大学における教育研究を、高いレベルでスムーズに始めることが可能となる。その結果、各大学の教員は、コビペ対策などの低レベルの指導から解放され、より専門的で応用的な教育と研究指導に注力できるようになる。

ただし、高大接続に携わる大学図書館職員には高い支援力が求められる。そのため、準備と実施を通じて、必然的にスキルアップも期待できる。「確かな情報集め」の必要性に気づいていない高校生への支援は、明確な目標のある卒業論文執筆者向けの支援よりも、成果を出すのが難しい。単に新入生ガイダンス業務を引き継いで既存資料で説明した経験だけでは、興味を持って聞かせることすら困難だろう。少なくとも図書館司書の資格を持ち（なければ取得か自学自習する）、できれば基礎ゼミ等でレポート作成支援を担当し、「新入生は、どこでつまづくのか」を知り、「それに対し、どんな支援が役立つのか」を工夫して、改善を重ねた経験があることが望ましい。それに加えて、自分自身が何らかの探究テーマを持って、解決の仮説

を立て、その論拠となる情報を切実に探し求め、自校で取り扱っていないデータベースを含めてさまざまなツールを徹底的に使ってみた経験があると、理想的である。自身の探究活動を通して、情報源としてのネットや道具としての生成AIが、どのような特性を持ち、危険性や限界がある反面、有用な使用方法もあることも身をもって痛感していると、格段に説得力が増す。

7. 今後の課題

ネットと生成AIの時代における探究学習支援には、従来の図書館司書資格課程の範囲外の知識・スキルの研鑽が必要である。しかし現状では、大学間・職員間で能力のバラつきが大きい。また、法令上も各大学の規定等においても、大学図書館職員にそのような役割は定められていないため、研修などの育成にも困難が伴う。

しかし、これまで述べてきたように、大学図書館職員による探究学習支援は、高大接続において大きな効果が期待できる。それに貢献できる職員の必要性に気づいた大学から優れた実践例を積み上げていけば、高大接続のトップランナーとなり、他の大学は追従せざるを得なくなるだろう。

その前段階として、大学の中で「研究支援を任せられる、情報の専門職」として認識される必要がある。そのためには、まず自校のカリキュラムを熟知し、入学から卒業までの各段階において、学生や教員がどのような支援を求めているのか（あるいは図書館による支援で問題が解決する可能性）を探り、それに対応した内容でガイダンスや基礎ゼミでの支援を実施し、学生および教員へのアンケートで効果を測定して、常に改善して期待に応えることが必須であろう。その上で、授業との連携提案、研究室のテーマに応じたオーダーメイド型講習のように、徐々に支援のレベルを上げていくことで信頼を深めることにより、大学図書館職員は教育研究に不可欠な存在となり得る。

注

1) 「今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開」(令和5年3月)

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/20230531-mxt_kyyouku_soutantebiki03_2.pdf

2) お茶の水女子大学「2020年プレゼминаールのご案内」

https://www.ao.ocha.ac.jp/ao/body/aotop_d/fil/preseminar2020.pdf

(うめざわ たかのり：中央大学大学院事務室)

[NDC10：017 BSH：1.大学図書館 2.探究学習 3.図書館員]

高校の探究学習を促す大学図書館の理論的な枠組と支援の実際

稲井達也・古川真理

1. はじめに—高大接続の理論的な枠組

探究学習は、生徒が自らの興味・関心や疑問などに基いて問いを設定し、生徒が自ら主体的に問いを解決することを通して、深い学びを実現させていこうとするものである。問いの解決を図る学習過程の中で、他者との対話的な学びを行ったり、図書資料をはじめ、多くの情報にも当たったりするため、情報活用能力が身につけられる。このほかにも、探究の学びの過程で学習デザインを工夫することによって、コミュニケーション能力や論理的思考力、批判的な思考力など、実社会・実生活につながる汎用的な能力（generic skill）が身につけられる。

探究学習は教師の教え込みとは異なり、生徒が自ら学ぶ学習観に基づいており、大正自由教育の児童中心主義や戦後初期・昭和20年代の新教育での経験主義教育のカリキュラムにも通じるものがある。また、知識を獲得することに大きな意義を見いださず、知識は社会や他者との関係性の文脈の中で意味付けられるとする社会構成主義の考え方を背景としている。探究学習では旧来の高校教育で重視されてきたような、できるだけ多くの知識を効率的に獲得するというような学習観とは本質的に異なるものでもある。

高校の探究学習では、①教科・科目で行うもの、②総合的な探究の時間で行うもの、③学校設定教科・科目の中で行うものに分けられる。高校では

教科・科目の授業では行わず、教師の講義中心の授業が行われている学校が多く見られる。

本来的には、教科・科目の中で探究学習を行った方が、さまざまな教科・科目の中で探究的なものの見方や考え方が身につけられるため、探究学習が日常的なものとなる。高校の実情は単純なものではなく、探究学習は大学受験には役に立たないと考えている教員は少なくなく、一部の進学校を除いて探究学習を教科・科目の学びと切り離してしまう傾向があり、また、高校では学校間の学力格差が大きい。高校入試によって学力層を輪切りにしてしまい、高校によってレベルが大きく異なる高校特有の課題でもある。

伝統的な進学校では、受験勉強は生徒が学校外で自主的に行うもので、高校の授業で取り上げることをあまりしない。授業では個人では行うことのできないような学びを実現させようとする傾向があるため、探究学習を導入しやすい。一方、中堅校では進学校と状況は異なり、探究学習は「総合的な探究の時間」に特化して行い、総合型選抜入試の材料にしようと戦略的に考える傾向が見られる。とりわけ私立高校では少子化の中にあっては進学実績が募集に影響するため、探究学習に踏み切れない高校は少なくない。探究学習が一過性のブームで終わる懸念もある。

いずれにしても、探究学習は高校、大学、実社会・実生活の学びとの関連性の中に位置付けて捉

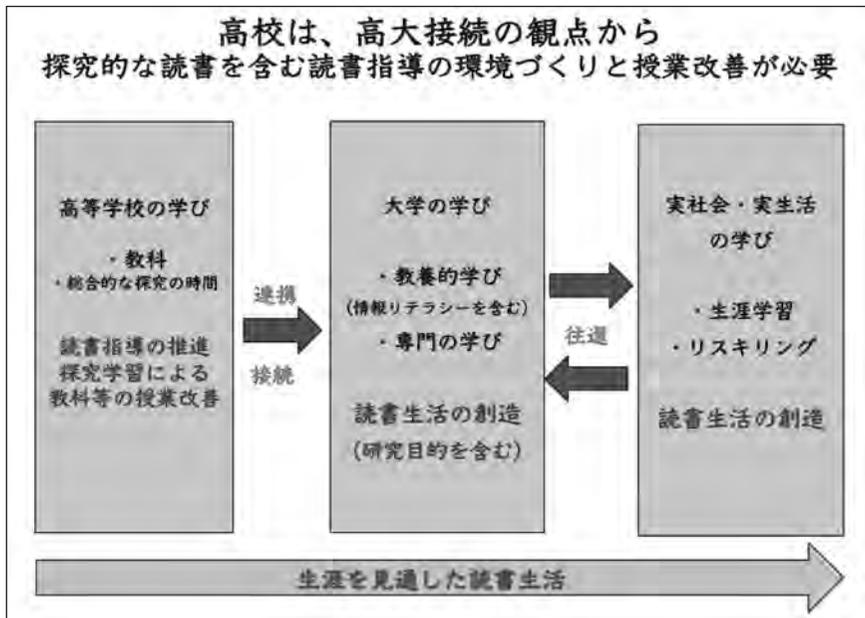


図. 高校の学びと大学、実社会・実生活の関係性

える必要がある。高大接続はこれまで行われてきたが、高大連携では高校の学びと大学の学びを接続させることに意義がある。このため、高校の探究学習と大学の学びの共通性を探究学習に位置付けることにより、大学図書館が高校の探究学習を支援する理由を見いだすことができるのである。高校が探究学習を充実させることによって、大学の学びと連携しやすくなる。従って、大学図書館は高校の探究学習のどの部分の教育内容を支援するのかについての焦点化を行い、支援を図る実践レベルでのバリエーションを持たせることが学習支援の鍵となる。

(いない たつや：大正大学教授・附属図書館長)

2. 大正大学の高大連携の取り組み

大正大学は、大学の教育姿勢としても高校や社会との接続に注目しており、2021（令和3）年度より各地の高校と大学教育を接続させるため、大学教員による高校での授業や本学学生と高校生の商品共同開発など、さまざまな取り組みを行って

る。高校の教員が本学見学の際に、高校生の図書館見学や授業での図書館利用をご相談されることもたびたびある。

また、現在の図書館は2020（令和2）年に竣工されたが、以前より地域開放を行っており、特に中高生は、簡単な利用登録を行えば時期を問わず利用が可能である。日頃から多くの生徒が来館している。

図書館では、高校の探究学習に関連するテーマの書架を中心とした図書館見学実施のほか、自分の探究テーマに基づいた資料探しの支援を行っている。この支援を行う際は、高校の探究学習のカリキュラムを踏まえて行う必要がある。探究学習のうち、生徒が自分の探究したいことを特定し、リサーチクエストを行い、深く調べる段階になる際に、資料を探すためのレクチャーを実施している。

十文字高等学校との高大接続は、2024（令和6）年度から始まり、今年度で2年目になる。十文字高等学校には自己発信コースがあり、探究学習に

ついて深い取り組みを行っている。今年4月、このコースの2年生16名と教員2名が来校した。

生徒の訪問に際し、高校の教員とは密に連絡を取り、資料探しにあたって今まで生徒が学んだことを共有した。十文字高等学校の場合は、事前に公共図書館での資料探しのレクチャーを受け、自分のテーマに添ったテーマの図書を探すことはある程度慣れている状態であった。高校からの要望は、どのように自分の欲しい文献を見つけ出したら良いかのレクチャーであり、今回はさらに生徒の探究を深めるため、論文の検索と入手方法の説明を中心に、検索時のキーワードの選び方などの説明を行った。当日は約2時間のスケジュールとし、①図書館見学(約15分)、②図書館職員によるレクチャー(約15分)、③生徒がそれぞれ自分の興味のある本、論文を探す(約1時間半)時間を設けた。②では「論文とは何か」という説明から始まり、CiNiiでの検索と閲覧、複写申込までを説明、③で本・論文を閲覧し、必要な場所の複写を行い、必要な場合は論文の他機関への文献複写依頼を行う時間とした。高校の教員とは、事前に複写代金支払いも含めた申し込みの手順などを打ち合わせた。

来校した生徒は、図書館の利用手続きを行い、以降調べ物をする際など、その後は自由に図書館を利用している。



写真. 十文字高等学校の生徒へのレクチャーの様子

また、2020(令和2)年度より図書館の独自講座「学びのコミュニティ」と題し、学生へ課外の講座を開催している。今年度より受講対象を拡大し、高校生・一般の方も参加可能とした。このような講座実施も、高校生の探究を深める大事な機会であり、大学図書館として高大接続に寄与すると考える。

2025(令和7)年8月は「高校生学びチャレンジ 地球×宇宙」をテーマに5講座を企画した。講師は本学の高橋秀裕名誉教授、国立極地研究所副所長の伊村智先生、国立天文台天文情報センター長の渡部潤一先生、宇宙ライターのエリカ先生、東京大学大学院理学系研究科助教の森脇可奈先生と多岐に渡り、高校生の好奇心を育み、新たな学びの可能性・探究心を持ってもらうことを目指した。対面、オンライン両方の受講を可としたところ、夏休み中であり、全国より多くの申し込みがあった。また本講座では、高校生からの質問に講師が回答する時間を十分に設けるように努めた。

高大接続については、今後も大学図書館として探究学習の支援等への取り組みが必要である。生徒は大学の図書館での資料検索を経験することにより、より学問的な資料を目にする機会が増え、また専門家に接することにより、探究内容をより深く捉えることができる。大学図書館にとっても、次に大学生となる生徒の探究テーマに触れ、興味の方向性、また、高校での探究学習の進め方を学ぶ機会となる。このように大学図書館が探究学習へ関わることにより、高校生の学びを支援し、高大接続への重要な役割を担うものとする。

(ふるかわ まり: 大正大学附属図書館)

[NDC10: 017 BSH: 1. 大学図書館 2. 探究学習]

筑波大学附属駒場中・高等学校の高大連携

——探究学習をサポートする大学図書館と、探究学習を協働・実践する大学——

加藤志保

1. はじめに

筑波大学附属駒場中・高等学校（以下、筑駒）は、筑波大学の附属校ではあるが、大学の本部キャンパスのあるつくば市からは80kmほど離れ、東京キャンパスからも10数km隔たっている。物理的には距離がある中で、筑波大学附属図書館と筑駒は、トライアルの実施も含めて2013年より10数年にわたり高大連携を行ってきた（連携プロセスは拙稿（2020）「筑波大学附属図書館と附属学校図書館の高大連携」『筑波大学附属駒場論集』59集，pp.155-164.）。その取り組みについて紹介する。

2. 筑波大学附属図書館「筑波大学附属図書館高大連携サービスパッケージ」

筑波大学附属図書館との間では「(1)図書館資料貸出サービス，(2)レファレンスサービス，(3)文献複写サービス」の三つが「高大連携サービスパッケージ」としてサポートされている。

筑波大学附属図書館は、中央、医学、体育芸術、図書館情報学、大塚の5館から成り、それらすべての図書館が「資料貸借」の対象となる。筑駒の学校司書から筑波大学附属図書館の利用者支援担当にメールにて貸出依頼をすると、利用者支援担当が、他館の所蔵本も含め中央図書館にとりまとめて、一括で駒場に送付してくれる。上限は30冊まで、貸出期間は3週間だが、予約が無ければ2度延長ができる。つくば→駒場間の送料は往復ともに筑駒が負担する。送料負担によるハードルを懸念したが、リクエストのある学術書などは、1冊あたりの単価が高かったり、公立図書館では所蔵が無かったりする本もあり、高価な本でなくとも3～5冊まとまれば、購入コストと送付コスト

は等しいか割安になる。筑駒図書館はスペースが潤沢ではなく、既に書架がいっぱいなため、利用が限定的な蔵書を増やすことを避けられるメリットもある。授業に応じた関連図書の借り出しと、個人からの取り寄せリクエストがおよそ半々くらいの利用であり、2023年度42件、2024年度47件、2025年度は9月現在で25件となっている。

これら筑波大学附属図書館が所蔵する資料以外にも、ILLを利用した他大学からの取り寄せの依頼にも対応が可能で、最も遠い図書館では2024年度にアメリカ・サンフランシスコ大学からのロシア語文献の貸借が実現した。

レファレンスにおいては、ドイツ語文献の調査をお願いし海外の大学から入手していただいたり、国内のローカル誌に40年以上前に掲載された記事を調べて取り寄せていただいたこともある。

これらの支援により、生徒、教員ともに、駒場に居ながら、図書館を通じて、日本のいかなる地域にも海を隔てた世界にも、手が届くことの実感（実際に海の向こうから借りた資料を手を持つ体験、印刷された記事を手に入れる体験）を得られることは、自身の探究のフィールドがそれらと地続きにつながっているリアルな手ごたえとなっている。

3. 筑波大学附属図書館スタッフによる「学術情報の探し方」講座

筑波大学附属図書館で日常的に大学生を対象に講座を行うアカデミックサポート課学習支援担当のスタッフを講師に招き、中3生を対象に学術情報をどこからどのように得るかを教える講座を開催している。

取り組みを始めた2018年度当初は、スーパーサ



▲2025年7月16日、学習支援担当松野渉先生の講義の様子、写真は同渡邊朋子係長

イエンスハイスクール (SSH) の技術・家庭・芸術科の取り組みのセミナー「メディア虎の穴」の中の1プログラム「学術情報の探し方」で、希望する有志の生徒（主に高1、2年）約20名を対象とした講座を行ってきた。2021年度からは対象を拡大し、家庭科の植村徹先生（司書教諭）の授業として中3全クラスの生徒に実施している。

講座は、中学生でもアクセスできるデータベースの中からCiNii Research, e-Stat, e-Govを紹介、検索方法のレクチャーと実習を組み合わせ、最後に引用のルールを伝える内容で実施してきた。時を同じくして、GIGAスクールによる中学全生徒の端末利用が可能となったことで、端末を有効活用する学習方法を教える役割も担う講座となった。

直近の2025年度は7月に実施し、上記三つのデータベースに加え新たに国立国会図書館サーチ・国立国会図書館デジタルコレクションの紹介も加え、充実度が増している。

以下は、生徒の感想と、実施後のアンケート結果の一部である。

- ・論文を調べてみて都市伝説や音楽など面白いテーマの論文がたくさんあって読んでみたいと思った
- ・18になったら国立国会図書館に登録したいと思った
- ・中学生でも学術的な情報に触れることのできる方法を知ることができて、これから何かを調べるときにとっても役に立てられると考えた
- ・自分が今までレポートを書くときに参考にしてきた資料がこんな簡単に見つけられるんだなって意外に感じました

4. 学校図書館をフィールドとした大学・大学院と協働する実践

(1) 建築ワークショップ（筑波大学芸術専門学群の学生・院生によるワークショップ）

2024年度には、筑波大学芸術系助教加藤研先生の研究室の学生・院生による図書館を中心とした校舎の設計研究のフィールドとして、生徒をまじえた研究活動が行われた。「筑駒校舎のリニューアル・デザイン」をテーマに、学生・院生が6月～9月の3回、学校図書館にて生徒の行動観察を行い、10月に校舎内の見学と生徒観察による事前調査の上で、大学生・院生・生徒・教員の混合グループをつくり、ワークショップを行った。

12月に中間発表、2月に模型とポスターの卒業制作・発表が行われ、3月末から本校の図書館にポスターを展示した。5グループ5様の図書館を中心に据えた校舎デザインを、指差しながら語り合う生徒たちの姿を見ることができた。



▲「筑駒校舎のリニューアル・デザイン」ポスター

(2) 調査、研究のフィールドとして（2023・2024の文部科学省事業）

2023年・2024年「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」の調査研究を行い、学校図書館の研究者である筑波大学助教の小野永貴先生、青山学院大学准教授庭井史絵先生による「特定分野に特異な才能をもつ生徒における「学校図書館」の位置づけに関する研究」が実施された。

学校環境としての校内施設をフィールドとしたアンケートとインタビューからなる調査において、本校の学校図書館が生徒、教員にどう捉えられているか、何を期待されているか立体的に明らかになる取り組みとなった。その調査結果は大学にも共有され、それを受けて、ラーニングコモンズやサードプレイスとしての学校図書館の在り方について、引き続き大学および校内での構想が進めら

れている。

※調査研究の詳細は、筑波大学附属駒場中・高等学校(2025)『2024(令和6)年度「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」研究報告書』「才能が伸びる環境と風土」を参照。

5. 図書館以外での高大連携の取り組み

(1) 中3, 高2の「筑波大学訪問」

その名の通り、筑波大学の研究室を訪問する事業だ。附属駒場中・高等学校連携小委員会の委員を務める教授を中心に、中学生・高校生の受け入れに手を挙げた研究室が講座を開講する。講義型もあれば実験型、体験型もあり、哲学から医学まで幅広いプログラムの中から、個々の生徒が選択した研究室に参加している。

★2024年実施例

中3(2025/2/6)のべ26講座：私たちの周りに誰がいる？－生き物たちの保全と防御のはざまを見て歩こう、低速度撮影とドイツ文学、他

高2(2024/12/17)のべ27講座：つながり孤独はなぜ増えたのか、スーパーコンピュータ「Cygnus」見学、遺伝子データベースを用いた新型コロナウイルスの変異解析、他

(2) 総合学習「中3テーマ学習」, 「高2課題研究」

総合学習として、中学3年生で「テーマ学習」、高校2年生で「課題研究」に取り組んでいる。教員がプログラムを提示し、それらから生徒が希望した講座を受講する。その講座の中で、大学教員や専門家の研究室を訪ねたり、講義を受けたり、大学生・院生とともに課題に取り組む講座もある。たとえば、2024年の障害科学の「ともに生きる」では、全12回のうちの1回は、筑波大学に在籍する現役の学生から、特別な配慮の入試における実践、大学の授業受講における実践を聴く。11月の1回では、筑波大学の研究室を訪問し、教授の研究室で講義を聴き、現在行っている研究と施設を見学する。続いての1回では、それらに基づいて研究者・院生の助言を得ながら、同附属特別支援学校の児童生徒とともに遊べるプロジェクトンマッピングを用いたゲームを作成し・実践する。現場の振り返りでは、ゲームの出来は粗削りであっても、平面と3次元の組み合わせが院生や研

究者・教員の発想からでは生まれてこない創られ方をしていたことに発見があったと講評をもらった。

★2024年度の内容

中3テーマ学習：図書館に行こう、言葉と映像の世界、筑駒附属博物館、Duel Mathematicians(仮)制作委員会、地学実験パラダイス、スポーツスピード、お料理ひとりのできるもん! + a, ミュージカル(で英語)を極める

高2課題研究：本を出版する、水俣から日本社会を考える、ともにいきる、スマートデバイスの開発～現代的ものづくり、数学の本質は自由にあり、環境ウイルス、スポーツの科学、ハリール・ポッターを読む／観る／体験する／語る

※総合学習では、上記内容に応じて教員の裁量で筑波大学に限らず、東京大学、東京藝術大学ほか、さまざまな大学教員、研究室、一般企業と連携している。

6. おわりに

本校では、遠隔でありながら大学図書館の資料支援、レファレンス支援、学術的支援を直接に受けられるシステムを作ることで、物理的な距離を超えてきた。折りに触れ、生徒や教員が直接に大学図書館のスタッフから話を聴き、大学図書館の資料(大学の蔵書印がありブックコートした)に触れる機会を持つことで、大学図書館を身近に感じられるよう工夫をしている。

また、授業や課外活動において、大学教員の教えを得る機会や、大学教員・大学生とともに行う探究学習の機会が織り込まれている。研究室を訪れる機会もあり、それらにより自身の未来像や、探究から広がるさらにその先を具体的に描きやすくなっている。

何よりも、これらの取り組みの多くは教室や図書館などを間口として、校内に居ながらにして経験できる。学校生活のフィールドに日常的に編み込まれていることで、生徒だれもが「自身の興味・関心は、自分の手で掘り下げ手繰り寄せていける」と日々実感し、内面化できる効果は大きいだろう。

(かとう しほ：筑波大学附属駒場中・高等学校図書館)
[NDC10:017

BSH:1.大学図書館 2.学校図書館 3.探究学習]

★ 特集◎高大連携における大学図書館の可能性 ★

学びの転換期に図書館はどう立ち会うか

—— 中学生が「卒業論文」を書く探究学習の現場から ——

山崎勇氣

高校までの学び、大学からの学び

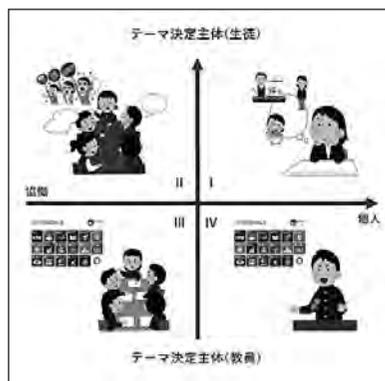
大学入学後すぐのこと。新入生オリエンテーションの一環で、図書館の書庫を案内された。職員が利用ガイダンスをするかたわらで、目前に広がる途方もない数の文献と、それを整理する分類原理に圧倒されていた。「ここには人類の叡智が詰まっている。それが、人が生み出した技術で整理されている。自分はそこへ迷い込んだ、小さな一個の存在に過ぎない」などと感じたのを覚えている。

その後の大学での学びは、高校までのそれとは随分違った。教科書や講義を通じて覚えた事柄や解法を、ペーパーテストで出力するケースはまれで、代わりに、いかに図書館で文献を読み込み、自身の意見を述べるか、論証するかが求められた。大学入試にも一部そうした形式はあったが、少なくとも高校までの学びからは大きく様変わりした。テーマを自分で決めることも多く、そうした大学からの学びの中で、「これが中学や高校でもやれたら面白いだろう」などと考え始めた。

いま、中学・高校の一部カリキュラムは、上記のような大学での学びに近づいている。「探究学習」と呼ばれる学習活動がその代表格だ。その定義は論者によってさまざまあり、形態も授業者によってさまざまだが、「主体的な学び」のスローガンのもと、「多様な資料を用いる」「何らかの成果物形式に考えをまとめる」という一連の学習活動は概ね共通する。これまで多くの大学生が、大学入学後に初めて触れた学習形態は、何らかのかたちで中等教育段階でも学ばれるようになったのだ。誰がテーマを決めるのか、何人で学ぶのか

ここでもう少し「探究学習」について整理する。さまざまな定義・授業形態があるとはいえ、たとえば右上図のような4象限に分けて考えることができる。

- ・「学習テーマの決定主体」(生徒/教員)
- ・「学習者の構成単位」(個人/協働)



この分類に基づけば、第Ⅰ・第Ⅱ象限は「生徒自身が学習テーマを決定」する授業だ。生徒の興味は多様なので、当然ながら多様な分野が学ばれる。必要な参考文献も多様になる。とりわけ「Ⅰ」のような個人学習は、より個々の生徒の興味関心が反映されたテーマになる。サードプレイスとしてのカフェ・推し活・ファッションといった中高生らしい関心から、家庭環境・対人関係といった当事者的な目線のテーマまでさまざま。対して「Ⅱ」のような協働学習の場合、メンバーの関心から最大公約数的な分野が選択されるか、あるいはいずれかのメンバーの関心に他のメンバーが合意することで学習テーマが決まる。

生徒自身がテーマを決定する第Ⅰ・Ⅱ象限に対して、「授業者がテーマを決定する」のが第Ⅲ・Ⅳ象限だ。選ばれるテーマの最たる例が「SDGs」で、教員からSDGs(社会課題の解決策模索)を大テーマとして与えられ、生徒はSDGs17項目の中からグループのテーマを考える。ここでも、個人学習なら個人の選択が、協同学習ならグループメンバー間で最大公約数的なテーマが決定されるが、あくまで「社会課題」「課題解決」というテーマの枠が指定されている。

探究学習全盛期でも学校図書館活用は進んでいないさて、先述した四つの象限で探究学習を分けたとき、現在多くの学校で採用されているのは第Ⅲ

象限の授業形式である。背景には、「生徒は社会課題を学ぶべき」「協働で学び、チームワークを養うべき」という教育観がある。校内の人的リソースや授業時間数など他にもさまざまな要因はあるが、現在多くの学校では、概ね授業者自身のこうした教育観でもって、第Ⅲ象限の授業が設計されている。そして残念ながら、第Ⅲ象限のような授業での図書資料や学校図書館活用は芳しくない。

過去、勤務校である清教学園が、文部科学省の委託を受けて実施した調査¹⁾では、第Ⅲ象限の探究学習について、学習者から次のような語りが聞かれた。曰く、「SDGsのような社会課題と自身との間に関係性を見いだせない」「学びを深めるほどの個人的な動機がない」「教員やグループメンバーの意図がテーマ設定に先立ち、自分の意志が反映されない」「大人の指示で社会課題を『考えさせられている』感じがずっとある」「協働学習は、頑張っただけで課題に取り組んでも『フリーライダー』を生む」…など。こうした学習者の語りは、他校においてもよく聞かれる。そしてこの状況にある探究学習では、たとえ複数の学校司書が配置され、予算や蔵書に恵まれた学校図書館があっても、図書館は活用されづらい。読書という認知負荷の高い学習をわざわざとるメリットも、多様な文献を読み込み自身の関心を広げる動機もないからだ。

このため多くの探究学習の現場では、学習者が「〇〇 解決策」とWeb検索し(あるいは生成AIに問い)、ヒットしたそれらしい事例を参考に、自分たちの課題解決アイデアを話し合う状態になっている。こうした状況に対して、学校図書館が学習支援者の立場からできることは少ない。あらかじめ「問い」(社会課題)や「結論」(解決策)が限定された授業では、図書館を活用するメリットも、読書の動機も乏しく、最低限必要な情報をWebで集めれば済むからだ。学校図書館整備等5か年計画など、学校図書館をめぐる法令が整備される一方、実際の探究学習の現場では、このように授業設計と図書館機能の乖離が大きく、依然として活用が進んでいないのが現状だ。

今回の企画テーマのように、「高大連携における大学図書館の可能性」を検討するにあたっては、大学に入学してくる学生の多くが第Ⅲ象限の探究学習を経験していること、多くの場合、学校図書館や図書資料で学んでいないことに留意すべきだろう。

清教学園中学校「卒業論文なんでやねん」

さて、第Ⅲ象限の探究学習が多くの学校で実践され、図書館が使われていない現状がある一方、「第Ⅰ象限」の探究学習を実践し、学校図書館を活用している学校も少ないながら存在し、増えつつある。そうした学校の多くが、探究学習を「生徒が自らの興味を学ぶべき」「生徒の自己の在り方・生き方にコミットする学習機会であるべき」と考えている。ここからは一例として、勤務校である清教学園中学校「卒業論文なんでやねん」の取り組みを紹介する。

取り組みはシンプル。個々の生徒自身がテーマを決め、図書館で先行研究に学び、フィールドワークを実施して自ら情報を生みだし、論文にまとめる、というものだ²⁾。期間は中学2年の11月から中学3年の11月まで1年間。1単位の授業(週あたり1コマ50分×総計30回程度)で学ぶ。ブロック・インライン引用を用い、APAスタイルで文献を表示し、自らの考えを述べる。司書教諭を中心とする授業担当者2名に加え、学校図書館スタッフが学年150名のレファレンスを担う。分量規定はないが、論文の平均文字数は22,000字。参考文献の平均数は、図書11.3冊、通読図書5.9冊、Web資料3.2冊…。

こうして書くと、一般的な学部生の研究形態・論文形式と近いことがわかる。ただし、先行研究に学び、新たな知見を生み出すことを目的とする学術研究に対して、中学生の探究学習はむしろ、生徒自身の学習経験・過程を重視する。質の高い論文を書くこと、合格すること、それ自体が目的ではない。テーマの設定から一貫して、個々の生徒自らが学習のイニシアチブを握り、それぞれの道のりを歩み、自分にしか成し得ない研究経験に学ぶのが目標だ。

多様な生徒が、多様なテーマを設定し、多様な学びの道のりを歩む。そうした生徒それぞれの学習過程にアプローチし支援できるのが、豊富な資料を備えた学校図書館と、橋渡し役となる学校司



書・司書教諭の存在だ。清教学園図書館の書架を眺めれば、推し活、ビデオゲーム、スポーツメンタル、テーマパーク、ボーカロイド…もちろんSDGs的な分野まで、多様な蔵書でコレクションが構築されている。研究のはじめは分野そのものを扱う資料が、やがて研究が進むうちにテーマの絞られた資料が、彼らの探究プロセスに多様な視座とテーマ設定の可能性を与える。そして文献とともに、過去18年間の卒業生たちの論文が収められ、先輩作品もまた後輩に先行研究として利用される。図書館で先行研究に学んだ生徒は、自らも先達として論文を収め、後輩の研究活動に資する。



「読書」や「論文」のような負荷の高い学習活動は、一般的な探究学習では避けられる。それでもなお、その形式を採る学校が本校も含め細々とでも絶えないのは、学習者の興味や関心が、学習への内発的な動機付けとして燃え上がる時の力を知っているからだ。興味があるから難しい本やフィールドワークに取り組める。自らの研究を論文として残そうとする…。このとき授業者は、教える・管理する存在から、あくまで文献や研究者への橋渡し役、研究の助言に徹する「黒子」となる。授業の中で出合う文献、専門家、新たな考え方、同じ教室でそれぞれのテーマに没頭するクラスメイトの姿…。「黒子」によってつくられる学習環境は、生徒が「自己の在り方生き方」を見いだすきっかけとなるのである。

こうした「学習者中心」ともいえる授業の在りようが、結果として図書館への信頼感、学校司書や司書教諭とのコミュニケーションの敷居を下げる。じっさいに、清教学園生徒のひとりあたり年間平均貸出冊数は、中学生42.7冊、高校生8.1冊と全国平均³⁾からみても高い。学習者中心の授業設計が図書館活用の必要を生み、そこでの利用実態がその他の図書館利用にもつながっていく。

動機・学習過程・教育課程へのアプローチ

中等教育における探究学習の現状を踏まえ、進学先としての大学図書館は教学に対しどんなアプローチができるだろうか。肝となるのは、学生の「動機」「学習過程」「教育課程」に、図書館がどこまでアプローチするかだ。電子ジャーナルや論文検索の利用が中心の現在、図書館の書架を歩き先行研究に学ぶ必要性は学生に実感されづらい。設定された問いにただ答えるレポートなら、最小限の参考文献でも課題をこなせる。しかしその一方で、図書館は個々の学生の内にあるテーマに、豊富な蔵書をもって支援できる強みがある。書架や司書によるレファレンスが、学生の研究の「動機」に対応しながら図書を差し出すとき、彼らは新たな学びへの一歩として図書を手に取る。多様な図書が並ぶ書架での「学習過程」を通じ、多様なテーマへと彼らの関心は広がっていく。新たな図書とレファレンスの必要を生む…。

こうした図書館であるからこそその学びを、大学でも何らかの形で「教育課程」に位置付けていくことが必要だろう。以前、某大でFDを担当する教員が本校の取り組みを指し、「これを大学での初年次教育に取り入れたい。興味があるテーマなら、図書館を使うなら、中学3年生にだって1年間で論文が書けるのだから」と言った。本校のような探究学習の授業は、あるいは大学の初年次教育でこそ有効なのかもしれない。自らテーマを決め、図書館で文献に学ぶ、フィールドワークを実施するといった在り方は、高校までほとんどの学習内容を指導要領や授業者によって決められてきた新入生にとって、重要な学びの転換機会となるからだ。与えられた問いとそれに紐づく答えを求める授業者中心の学びから、自ら問い自ら答えを導き出す学習者中心の学びへの転換。この転換の機会に、大学図書館が立ち会うことの意義は大きい。

注

- 1) 山崎 (2021) 『どのような探究カリキュラムが学校図書館活用を促進するか』(文部科学省「令和3年度 学校図書館の活性化に向けた調査研究委託事業」参加事業)
清教学園の第I象限・第III象限の授業を比較し、図書館利用、文献活用、生徒と教員の学習観・教育観を調査した。
- 2) 授業で用いる教科書『卒業論文のデザイン:「なんでやねん」2025』をWeb公開中。詳細はそちらを参照されたい。
- 3) 文部科学省 令和2年度「学校図書館の現状に関する調査」による公立校全国平均は、中学9冊、高校3冊。
(やまざき ゆうき:清教学園中・高等学校図書館)
[NDC10:017 BSH:1.学校図書館 2.探究学習]

専修大学図書館における高校生を対象とした 司書インターンシップの取り組み

窪田 藍

1. 司書インターンシップの概要と実施の経緯

専修大学図書館では、本学の高大連携協定校ならびに教育交流提携校および神奈川県教育委員会による県立高校生学習活動コンソーシアム「高校生インターンシップ」事業の高校生を対象とした司書インターンシップを毎年実施している。発端は、2007年に高大連携協定校の神奈川県立ひばりが丘高等学校（現：座間総合高等学校）からの依頼により、同校の生徒を受け入れたことに始まる。2011年からは、すべての高大連携協定校に対象を広げ、その後も受け入れを拡大している。

受入人数についても開始当初は1校5名であったが、現在は1日につき最大6名、実施期間は3日間のため、計18名に拡大した。毎年、4校から6校程度の高校の生徒より応募があり、インターンシップ受入担当部署によると、日程によっては募集開始後5分ほどで枠が埋まることもあるとのことである。

また、例年は生田キャンパスの図書館本館のみでの実施であったが、教育交流提携校からの要望により神田キャンパスにある図書館分館でも実施を検討している。

2. タイムスケジュールと実施内容

2025年度は、7月22、24、28日に実施し、神奈

川県立座間総合高等学校、学校法人明星学園浦和学院高等学校、神奈川県立城郷高等学校、学校法人向学園向上高等学校の4校から計16名が参加した。ここでは2025年度のタイムスケジュールを基に内容を紹介したい。

①オリエンテーション

オリエンテーションでは、最初に参加者および担当職員の自己紹介を行い、参加者には、学校名、学年、名前のほか、司書インターンシップに参加した理由を聞いている。「本が好き」「図書委員なので、司書の仕事に興味がある」「公共図書館や学校の図書館を利用するが、大学図書館は利用する機会が無いので興味を持った」など、普段から本や図書館に慣れ親しんでいる生徒が参加している印象である。

次にスライドを用いて、専修大学図書館の概要説明および受入・整理・利用サービス・雑誌の4係の業務説明を各10分程度行った。この業務説明を聞いた上で、午後の実習の希望係を決めてもらうようにしている。

②図書館見学

図書館見学では、館内各フロアと貴重図書が収蔵されている特別書庫を各30分案内した。見学中、

表. 2025年度のタイムスケジュールと内容

	時間	内容
	10:00~10:05	集合・オリエンテーション会場へ移動
①	10:10~11:20	オリエンテーション (図書館概要, 各系の業務説明) (70分)
	11:20~11:30	休憩 (10分) 実習希望の係を決定しておく
②	11:30~12:30	図書館見学 (館内・貴重書庫) (60分)
	12:30~13:30	昼食休憩 (60分)
③	13:30~15:00	実習 (90分) 受入・整理係または利用サービス係のどちらかを選択
	15:00~15:10	休憩 (10分)
④	15:10~15:40	メモ帳づくり (雑誌係製本体験) (30分)
⑤	15:40~16:00	報告会 (20分)

辞典類などの参考図書の豊富さや、大型地図区画など、高校図書館の蔵書とは異なる部分について特に関心が高く大きな反響があった。特別書庫では、書庫の概要を説明した後、所蔵資料からフランス革命関係の資料や江戸期戯作など、教科書に掲載されているような資料を書庫内に展示し、資料の解説とともに間近で見学してもらっている。

③実習

実習は、受入・整理係のテクニカルサービス、もしくは利用サービス係のパブリックサービスのどちらかを選択し、2班に分かれて実施した。

受入・整理係業務では、図書の登録・目録作成・装備・配架まで行い、1冊の図書が利用者に提供されるまでの一連の流れを体験できるようにしている。

図書の登録では、重複調査をした後、NACSIS-CATの書誌検索・同定作業を行い、ローカルにダウンロードして、所蔵データを作成、登録番号の付与とバーコード貼付を行った。目録作成では、OPACの画面を見せながら、書誌と所蔵があることを説明して、書誌に関しては簡単な説明に留め、主に所蔵の請求記号および配架場所の決定をメイ

ンに体験してもらった。NDCの冊子および日本著者記号表から分類番号と著者記号の付与を行うが、特に分類番号については苦心する生徒が多いため、職員がサポートしつつ、図書館システムに入力していった。目録作成後は、蔵書印、図書ラベル貼付等の装備をし、完成した図書を請求記号の場所に配架した。配架後、OPACで整理した図書を検索し、自身が入力したデータがどのように利用者に見えるか確認できると、達成感を得られるようである。

利用サービス係業務は、前半にカウンター、後半にレファレンスの体験を行った。カウンターでは、返却された図書の配架および貸出手続きを体験してもらった。先にも述べたとおり、図書委員の生徒が多く、配架も貸出もスムーズにこなしている印象であった。

レファレンスでは、事項調査と所蔵調査の両方体験できるように例題を作成して、調査・回答までのプロセスを職員サポートのもと、生徒に考えてもらった。特に、事項調査ではインターネット検索で容易に答えが出ないような問題となるよう工夫している。今年度の例題およびプロセスは次のとおりであった。

(1) 志賀直哉『暗夜行路』はどの雑誌の何号に掲載されたのか。(事項調査)

(2) 掲載雑誌を専修大学図書館で読めるか。(所蔵調査)

(1)は、最初にインターネットで検索させて、『改造』という雑誌に断続的に掲載されていることは分かるものの、掲載巻号全ては判明しないことを確認し、完全な情報がどこに書いてありそうかを考えてもらう。全集には年譜や初出が掲載されていることが多いことをアドバイスし、志賀直哉は有名な作家のため、全集が出版されていると予想、図書館で志賀直哉全集を探し、記述を確認して、『改造』の全掲載巻号を特定する、というプロセスである。

(2)は、(1)で導かれた『改造』の該当号が図書館に所蔵されているかをOPACで検索し、所蔵があることを確認するプロセスである。

④メモ帳作り(製本体験)

雑誌係業務の一環として、図書館所有の製本機と断裁機を使ったメモ帳を作成している。事前に白紙と表紙になる紙を用意し、製本機で糊付けし、断裁機で好きな大きさに断裁、その後シールやスタンプ等で自由に装飾してもらった(写真)。この



▲製本機と断裁機を使って作成したメモ帳

メモ帳はお土産として持ち帰ってもらっている。

⑤報告会

報告会では、生徒がインターンシップで学んだことなどの感想を述べ、それに対し担当職員がコメントをした。報告会では以下のような感想を聞くことができた。

- ・図書館の仕事は貸出や返却のイメージしかなかったが、本が図書館に並ぶまで沢山の手順を踏んでいることを知ることで良かった。
- ・図書委員で貸出返却をやったことはあるが、大学図書館では貸出処理の際に無断持ち出しができない仕組みがあることを知り、セキュリティがしっかりしていると思った。
- ・司書の仕事内容は漠然としていたが、体験することで具体的なイメージを持てた。
- ・大学図書館で貴重書を持っていることを知らなかった。教科書で知っている資料を間近で見ることができて嬉しかった。

3. おわりに

2007年に始まった司書インターンシップの取り組みは、コロナ禍のため中止となった2020年、2021年を除き毎年実施されており、今年で17回目となった。当初は1日ですべての係を30分ずつ体験するプログラムであったが、2年連続で参加する生徒も出てきたことから、一つの係をじっくり体験することで、2年目は別係を選択できるようにする、成果物を持ち帰ることができる製本体験を追加するなど、改良を重ねている。今後も生徒の反応やニーズを踏まえて充実化を図っていきたい。

(くぼた あい：専修大学図書館)

[NDC10：017 BSH：1.大学図書館 2.高校生]

★ 日本図書館協会学校図書館部会第53回夏季研究集会東京大会 ★

学校図書館の今とこれから

—あるべき姿を探る—

高橋恵美子

8月8日、9日、日本図書館協会学校図書館部会夏季研究集会が開催された。参加形式は会場参加（日本図書館協会2階研修室）とオンライン参加の併用である。参加者は103名（スタッフ含む）、うちオンライン参加52名、会場参加51名。集会テーマは「学校図書館の今とこれから—あるべき姿を探る—」である。

*

1日目、講演と部会報告が行われた。

1. 講演 子どもの学ぶ力と意欲を回復するために

今井むつみ教育研究所代表理事 今井むつみ



今井氏は、認知科学、言語心理学、発達心理学を専門とする方で、最近の著書に『学力喪失』（岩波新書 2024）『AIにはない「思考力」の身につけ方』（ちくまQブックス 2024）がある。

子どもはことばをどう覚えるのか？ ことばを覚えるとは、ことばの意味、使い方を自分で推論

をすること、考える訓練をすることである。考える力は、知識を使って推論し、問題解決する力であって、知識だけたくさんあっても問題解決はできない。人は教えるのが大好きだが、人に教えられた知識は身についた生きた知識にならない。講演では、算数の文章題を使って子どもに知識があっても使えていない例が示された。

認知科学では、学力の基礎として、ことばの知識、日常体験の中で子どもが自分で育んだ知識、学んだ内容を自分の知識に関連づけ、推論する力をあげている。推論とは、例えば与えられた情報の行間を埋めながら情報の意味を解釈する、情報に潜むパターンをみつける、一つの事例から他の事例へ情報や知識を拡張する、といった力である。子どもが一つの概念を生活体験と結びつけて理解する（記号接地する）ことは、自分でするしかない。大人ができることは、教えるより、子どもの思考のクセを理解して足場かけをすることである。

子どもを自立した学び手に育てるには、ゲームが有効である。紹介された分数のゲームの事例で、子どもが間違っているけれども講師が簡単に正解を教えなかったという話にハッとさせられた。

ことばを覚えることは、推論を組み合わせることであり、考える練習をすること、思考力を育てることである。読解力の問題でもある。子どもが集中して真剣に知りたいと思うような場の設定が重要なのだと考えさせられた。

質疑応答では読書についての質問があり、今井氏によれば、その子が読みたいものを置くこと、子どもが楽しいと思う読書の機会を与えること、その子が何を好きなのかを見きわめ、一緒に考えることとのことであった。

《参加者アンケート》より

- ◆圧倒的な熱意を感じるご講演でした。教えることはできない、自ら学ばなければ、という言葉が印象的でした。学校図書館職員として具体的にどのような足場かけができるか、考え続けたいと思います。
- ◆認知科学の専門家からの見解は、学校図書館で読書を支える人間として大変参考になりました。読書に対する競争相手は確かに多いが、「自分で思考をコントロールできる」「立ち止って考える」ことができるのは、やはり読書だということが、改めて実感できました。

2. 部会報告 学校図書館をめぐる状況
図書館年鑑編集委員 堀岡秀清



部会報告は、教育施策に関して、学校図書館関連の動き、その他の流れで行われた。

教育施策に関しては、2024年8月の中央教育審議会答申の教師の処遇改善に関連して、学校司書等の支援スタッフに関する注記が紹介された。また中教審のデジタル学習基盤特別委員会の動きが報告された。この委員会は2024年11月「デジタル学習基盤に係る現状と課題の整理」を公表した。2025年1月「令和7年度以降の学校におけるICT環境の整備方針及び学校のICT環境整備3か年計画（2025～2027年度）について」という文部科学省通知が出された。以下、教育データの利活用、生成AI、会計年度任用職員制度についての報告があった。

学校図書館関連の動きでは、「IFLA-UNESCO

学校図書館宣言2025」の正式承認、文科省「令和5年度公立学校における学校司書の配置状況に関する調査」結果が2025年6月（9月修正版）に公表されたことなどが紹介された。以下、図書館・学校図書館の運営充実に関する有識者会議、日図協などの動きについては、報告4の内容と重複する関係で省略となった。

その他として、2025年度実施予定の「学校図書館の現状に関する調査」、学校図書館関連予算等の報告があった。

*

集会日程の2日目は、報告4本と研究討議が行われた。

3. 報告1 子どもたちのことばとこころを育む
読書・図書館教育を可能にした茅野市の底力とは

- | | |
|------------------|------|
| 茅野市立永明小学校学校司書 | 大西恵美 |
| 茅野市立永明中学校学校司書 | 濱真由美 |
| 茅野市学校司書支援員 | 溝口 南 |
| 茅野市こども読書活動応援センター | 名取元子 |



報告は、茅野市の読書活動のあゆみから始まった。市の施策のうち教育分野の柱に読書を据え、2000年全校一斉読書を開始、市全小中学校に司書教諭を配置、2001年学校司書を配置、2006年市教育委員会生涯学習課にて「子ども読書活動応援センター」の活動が開始された。2011年茅野市読書教育推進事業開始、2012年には小中学校の学校長

を学校図書館長に任命している。2024年からは第4次茅野市子ども読書活動推進計画のもと、心の教育としての朝読書、調べる学習への取り組みを行っている。

茅野市立永明小学校・永明中学校のメディアセンターが紹介された。この図書館が完成するまでに2019年から設計者と綿密に関わってきた様子が報告された。要望は118項目に及んだとのこと。成功のポイントは、設計者・市の担当者・学校長(図書館長)・学校司書とて思いを共有、情報を共有したことである。開館は2024年5月。

メディアセンターは、小学校・中学校が一つの図書館を使う。学校組織は別で予算や蔵書も別となっているが、管理運用は一体化している。学校司書は2名+学校司書支援員。複数クラスの同時利用が可能で、教科の授業での利用が増加したとのこと。開館2年目となり、小中の交流、飛び込み利用、中学校の利活用が増えた。

茅野市の市政が、読書を大事にし、図書館・学校図書館を重視していることが伺われる報告だった。

《参加者アンケート》より

- ◆読書活動が必要だと感じている地域では好循環するいい事例なのだと感じました。
- ◆子どもたちに理想的な環境が作られていると思いました。その時々でひとりひとりの志のある方たちの積み重ねなのだと思います。毎年、学校図書館経営方針を校長会で提出する仕組みなど、市教育委員会の仕組み作りや働きかけが大きいと思いました。頑張ってみえる司書さんが正規職員で勤務できるようになれば、さらによいと思いました。

4. 報告2 豊中市における学校図書館支援の取組と実践紹介

豊中市教育委員会事務局読書振興課企画調整係
主査 田中悠紀

報告は「とよなかブックプラネット事業について」と「学校図書館支援を行って」の2部構成で、本来報告者2名で行われる予定だったが、事情により報告者1名となった。

市立図書館・学校図書館の連携は1993年に始ま



る。2001年に学校物流便、市立図書館の学校図書館向けWebサービスが開始された。2005年、学校司書(1校専任、週5日勤務)の全校配置を完了。

とよなかブックプラネット事業は、2010年にスタートした。環境整備の三つの柱として、情報のネットワーク、物流のネットワーク、人のネットワークがある。こうした環境のもと、学校図書館の活用を進め、「ふだんづかい」の学校図書館を目指している。

学校図書館への支援には、30クラス以上の過大規模校、25クラス以上の大規模校のほか、新任学校司書配置校、学校司書不在校への支援などがある。悩み相談やグチを聞くことから学校司書の困りごとを知り、新たな支援につながることも多い。

訪問支援、遠隔支援の形で対応しているが、支援内容を見ると本当にきめ細かい対応をされていると感じた。レイアウト変更の事例についての報告もあった。

《参加者アンケート》より

- ◆長く学校図書館の先端を走り続けている豊中ならではの報告と思いました。学校図書館機能の中に「教員支援」を明確に示すのも市の担当者が積み重ねられた実践を踏まえてきちんと考えられているからでしょう。行政組織の中に学校図書館担当を置くことの意味を改めて感じました。

5. 報告3 学校図書館とゲームの親和性を探る 埼玉県立白岡高等学校司書 杉本大志



1日目の講演で、子どもの学びにゲームが有効であるとの話があった。ゲームは、テーブルゲーム、伝統ゲームなどのアナログゲームとテレビゲーム、スマホゲームなどのデジタルゲームの二つに大別される。図書館では機材等の関係もあり、アナログゲームが中心になる。初めて試みるならアナログから入るのがいい。

ボードゲームは、楽しいだけでなく使い方新しい付加価値や活用方法を生み出せる。コミュニケーションが大事なので、合意形成の練習にもなる。学校にいる、誰でも、いつでも、教科に関わらず、同じものを使いたいときに使える場所が学校図書館である。何をめざしながら楽しむかは、図書館や司書のねらい次第であって、おススメのボードゲームは一概には言えない。図書とつなげるのか、展示や学習とつなげるのか、コミュニケーション・集客を重視するのか、それぞれである。ボードゲームには無限の可能性がある。楽しんでほしい。

報告とは別に、ゲームに関する本、実際のゲーム等を、参加者が実際に見ることができるよう展示をしてくださった。ありがたかった。

《参加者アンケート》より

◆報告の前半の「知らない遊びを面倒くさがる」「幼少期の成功体験」というお話は、勤務校の生徒を見ていると感じていたことなので、大変共感した。「ゲームの本質」の話は、今井先生の講演とも共通するところがあったので、興味深く

拝聴した。1人から、2人で遊べるゲームの紹介は、進学校なので大変参考になった。

6. 報告4 学校司書の配置状況と「図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議」 JLA 学校図書館部会幹事・部会選出理事

高橋恵美子



学校司書の配置状況は、文科省の「令和5年度公立学校における学校司書の配置状況に関する調査」とJLAの非正規雇用職員に関する委員会が行った二つの調査（自治体向け及び個人向け）からの報告。2024年12月からの有識者会議（第1回～5回）については、学校図書館に関する部分を中心にした報告だった。

《参加者アンケート》より

◆自由回答に寄せられた記述は、数年前の私が書いたのかと思うほどだった。それに加え週1回の配置では管理職にもあてにされず、図書ボランティアのほうが重用される学校もあった。一方では、職員室で一緒に給食をいただきながら児童の様子を聞ける学校もあった。同じ自治体の中でも学校図書館に対する温度差がある。報われず現場を離れる学校司書も少なくない。学校司書の配置は自治体の努力義務とせず、法制化してほしい。

7. 研究討議

昨年続き、会場とオンライン併用で行う研究討議である。茅野市の報告に、司書教諭の関わりについて、学校司書の勤務（週5日、1日6時間・

7時間)、小学校・中学校の予算、図書館を使った調べ学習ナビなどの質問が出た。ゲームについては、事前に出された質問の回答があった。

研究討議の内容は多岐にわたるが、茅野市の学校司書全校配置にいたる状況、市長の声かけが大きかったこと、豊中市の場合は子どもと本を結びつける市民運動の力が大きかったことを指摘する意見が出た。茅野市も豊中市も学校図書館を支援する体制がしっかりしていると感じた。

《参加者アンケート》より

- ◆さまざまな校種や立場、全国の状況等を拝聴することができ、質疑応答等で報告内容を深めて理解することができたので良かった。世代交代がうまくできている自治体というのも、今回の学習会で個人的にキーワードに感じた。
- ◆学校図書館をきっかけに読書好きになったという発言で報われた気がしましたが、茅野や豊中のような優れた事例やかつての岡山の市民に支えられた図書館活動を広げていくために、自分のできることは何かを改めて考える機会になりました。



(たかはし えみこ：JLA 学校図書館部会幹事・部会選出理事)

*更に詳細をお知りになりたい方のために、第53回夏季研究集会東京大会報告集を、有料頒布いたします。頒価1,000円(送料込み)お問い合わせは、日本図書館協会学校図書館部会まで。

E-mail : gakutobukai@jla.or.jp

日本図書館協会学校図書館部会
第53回夏季研究集会東京大会に参加して

村上 民

職場の同僚2名での初めての参加であった。私共はこれまで学校図書館内の資料室(アーカイブズ部門)が主な担当であったが、今年度から学校図書館の運営にも関わるようになったため、これを機に学校図書館の現在の課題や可能性を学び、関係者の方々と交流したいと願っての参加だった。

冒頭の今井むつみ氏の講演では、子どもが「自分で」模索しながらことばを学んでいくプロセスが魅力的に示された。多くの豊かなことばに触れ、使うことを試していく場として学校図書館は深く関われるのではないか—そんな希望や期待を胸に、2日間の研究集会が始まった。

学校図書館をめぐる状況、特に学校司書の配置状況については、現状の厳しさを改めて認識するとともに、各報告によってさまざまな優れた取り組みに接することができた。なかでも茅野市の学校図書館運営に関する発表には大いに触発された。20年以上にわたる読書活動の歩みと現在について、学校司書、学校司書支援員、そして茅野市こども読書活動応援センターの皆様が、心をこめて温かい語り口で実践報告される姿には心を動かされた。茅野市が教育分野の柱に「読書」を据え、「ことばとところを育てる読書活動」を子どもの発達の各段階で切れ目なく展開、そのなかに学校・学校図書館での取り組みがしっかりと位置付けられているという。当方が勤務する図書館は、私学の一貫教育(幼稚園~大学部)の全体に関わる総合図書館といえる。今回示された茅野市の長期的な取り組みには多くのヒントがあると感じた。

最後の全体討議で一人の若い参加者から異色の質問が飛び出した。「もし自由に使える一週間があったら、皆さんは何をしてみたいですか?」一瞬、言葉に詰まる、考える、そして大小さまざまな夢が語られた—ことばの跳躍力に勇気づけられた研究集会であった。

(むらかみ たみ：自由学園図書館・資料室)

[NDC10 : 017 BSH : 学校図書館]



霞が関だより

▶第264回

●文部科学省

令和7年度新任図書館長研修

文部科学省では、毎年、新任の図書館長を対象とした図書館の管理・運営・サービスに関する専門知識等について研修を行い館長の資質向上を図っています。

研修日程表

[配信会場：国立大学法人筑波大学 筑波キャンパス春日エリア]

時刻	9月17日(水)	9月18日(木)	9月19日(金)	時刻
9:30	開講式(15分)			9:30
9:45	オリエンテーション(15分)	【講義⑥】(70分) 生成AIと図書館 (原田)	【特別講義②】(70分) 北欧諸国における 公共図書館の意義と役割 (和気)	
10:00	【講義①】(40分) 図書館行政の動向 (稲田)			
10:40	休憩(15分)	休憩(15分)	休憩(15分)	10:40
10:55	【講義②】(70分) 図書館の組織経営と チームマネジメント (豊田)	【講義⑦】(70分) 電子書籍の動向と図書館サービス (植村)	【講義⑧】(70分) 図書館における多文化 サービスと社会的包摂 (米田)	10:55
12:05	昼休み(65分)	昼休み(65分)	昼休み(65分)	12:05
13:10	【講義③】(70分) 図書館の経営戦略と正当性 (小泉)	【実践報告①】(35分) 図書館におけるSNSの活用 (仲尾)	【実践報告②】(35分) 災害への対応と復旧 ～輪島市立図書館の事例～ (堂ヶ口)	13:10
14:20	休憩(15分)	休憩(10分)	休憩(10分)	13:45
14:35	【講義④】(70分) 図書館の危機管理 (千)	【特別講義①】(70分) SDGsと図書館 (青柳)	【実践報告③】(35分) ランサムウェア攻撃とその対応に ついて～那覇市立図書館の事例～ (鳥袋)	13:55
15:45	休憩(15分)	休憩(15分)	休憩(10分)	14:30
16:00	【講義⑤】(70分) 図書館における障害者サービス (野口)	【パネルディスカッション①】 (110分) 図書館経営と館長の職務 (下吹越) (落合) (林) (池内)	【講義⑨】(60分) 著作権法の概要と動向 (井上)	14:40
17:10			休憩(10分)	15:05
			【講義⑩】(60分) 図書館サービスと著作権 (井上)	15:20
			閉講式(15分)	15:40
				15:50
				16:50
				17:05

以下、実施機関である国立大学法人筑波大学から、「令和7年度新任図書館長研修」についてご報告いたします。

令和7年度新任図書館長研修を終えて

新任図書館長研修は、新任の公共図書館長及びそれに準ずる業務を行っている職員を対象とした研修で、文部科学省及び筑波大学が主催、日本図書館協会の共催により実施しています。

今年度も録画配信を取り入れたオンライン形式で実施しました。

本研修は、3日間の日程で、講義（12科目13時間10分）、及びパネルディスカッション（1回）、実践報告（3回）から構成されています。日本の公共図書館に関する最新の基礎知識と図書館長に必要な知識、情報を提供しています。図書館長研修というと、難しい印象がありますが、講義は、入門的な分かりやすい内容から始まり、専門的な内容へと展開しています。実践報告では、図書館を「使える施設！」と思ってもらうために行政レファレンスやSNSでの情報発信に力を入れている沖縄県立図書館から、SNS活用の事前準備や具体的な活用事例、リスクと課題についてご報告いただきました。また、近年、全国的に災害が頻発している中で、能登半島地震や奥能登豪雨を経験した輪島市立図書館から、それぞれの災害への対応と復旧までの取組について、資料、施設、人員の3つの観点からご報告いただきました。

近年は、図書館の関わる領域が広がり、AIや障害者サービス、危機管理等の専門家にも講師をしていただいています。また、パネルディスカッションでは各地の図書館活動をリードする3人の図書館長に講師をしていただき、実践事例の紹介に努めています。

受講者からの質問はメールやWebフォームで受け付け、後日、講師に回答していただき、大学のWebサイトで情報を共有しています。図書館の現場で起きる具体的な課題に関して、多岐にわたる質問が寄せられています。

今年度は、203名が受講されました。全国から多くの図書館長が参加する本研修は、日本の公共図書館で最も重要な研修の一つであると言えます。また、図書館長にとっては、本研修の内容が、職員と対話し、仕事について提案するための拠り所となっているようです。受講者からは、図書館長だけでなく、他の管理職や一般職員にもこの研修を受講させたいという意見もあがっています。

これまでの新任図書館長研修を振り返って

新任図書館長研修は、平成10（1998）年度からエル・ネット（衛星通信）、次いでインターネットで全国の副会場に配信されており、いわゆる遠隔研修として、28年目を迎え、全国の新任の図書館長の受講が可能となりました。

アンケートでは、99%がこの研修の内容について、「図

書館の仕事に役立つ」、「受講してよかった」と評価しており、大変満足度が高く、自館の将来像の形成にも役に立っているという声があります。研修終了後に提出されるレポートからも、受講者が図書館の改革に積極的に取り組もうとしている様子がうかがえます。

本研修の講義要綱には、公共図書館の基礎知識と実践事例を掲載しており、研修終了後も手引きとして利用できるかと考えています。図書館長をはじめ、より多くの図書館職員に日常的に参照していただくなど、今後は、そのコンテンツがさらに広く活用されることを期待しています。

〈研修に関すること〉

文部科学省総合教育政策局地域学習推進課社会教育人材研修係

☎03-5253-4111（内線3676）

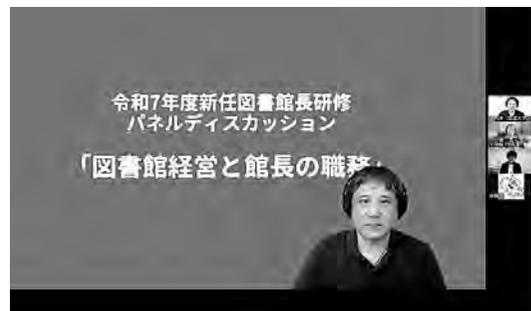
〈研修の実施、運営に関すること〉

国立大学法人筑波大学図書館情報エリア支援室

☎029-859-1051



▲実践報告：図書館におけるSNSの活用
講師の沖縄県立図書館・仲尾佳子



▲パネルディスカッション：図書館経営と館長の職務
モデレーターの筑波大学・池内准教授

会員募集のご案内—会員の皆さまへ

日本図書館協会（JLA）では正会員，準会員，賛助会員を募集しております。

本法人は，全国の図書館の発展，文化の進展を図る事業を行うことにより，人々の読書や情報資料の利用を支援し，もって文化，学術，科学の振興に寄与することを目的としています（定款第3条）。

これからの日本の図書館界に清新な活力を注いでくださる皆さまのご参加を求めています。会員の皆さまにおいては積極的な勧誘をよろしくお願ひ申し上げます。

詳細については本法人ホームページ「入会のご案内」をご覧ください。

https://www.jla.or.jp/membership_information/



日本図書館協会の活動を豊かなものにするために

ご寄附のお願い

本法人は，全国の図書館の進歩・発展を図るため，図書館運営の支援および政策提言，図書館職員の育成並びに研修・講習や図書館運営に関する調査・研究・資料収集，機関誌等の刊行など，図書館活動を通じたさまざまな事業を展開しています。

こうした公益目的にかなう事業のさらなる充実を図り，21世紀のよりよい文化的社会を築いていくため，広く市民や会員の皆さまからのご寄附を受け付けております。

なお，本法人への寄附金には特定公益法人としての税制上の優遇措置が適用され，所得税・法人税の控除が受けられます。

詳細については本法人ホームページ「ご寄附のお願い」をご覧ください。

https://www.jla.or.jp/request_for_donations/



charibon^{チャリボン} by V&B

あなたの本のご寄附が全国の図書館を支えます。

皆様の読み終えた本が図書館をサポートする活動に役立ちます。ご提供いただいた書籍、CD、DVD等を提携会社が買い取り、代金が日本図書館協会への寄附金となります。段ボールに詰めてご連絡ください。5冊(点)以上なら送料はかかりません。

古本を寄附
書籍類を梱包

集荷
配送会社

仕分け・査定
VALUE BOOKS

ファンドレイジング
日本図書館協会

5冊から送料無料

買取相当額の寄附

<https://www.charibon.jp/partner/jla/> TEL:0120-826-295 (パリュブックス)



誰ひとり読書から取り残さない図書館サービスを目指して

— 豊島区立図書館の「りんごのたな」の取り組み —

石川典子

1. はじめに

豊島区は東京都特別区の西北部に位置し、面積約13km²、人口約29万6000人の人口密度が全国で最も高い都市である。1日あたりの乗降客数が世界第3位の池袋駅を中心に、商業・文化・教育・交通が集積し、利便性と高い居住需要を併せ持つ地域となっている。

豊島区立図書館は、基幹図書館の中央図書館を含む7館体制で運営されている。豊島区には、かつて多くの芸術家が拠点とした「長崎アトリエ村」や「池袋モンパルナス」、現代の漫画文化の源流となった「トキワ荘」があり、児童文学雑誌『赤い鳥』創刊の地でもあった。図書館は地域の伝統文化に関する資料を収集・保存し、次世代への継承に努めるとともに、区民の生活やさまざまな課題解決に資する多様な図書館サービスを提供している。

本稿では、誰ひとり読書から取り残さない図書館サービスの実現を目指し、SDGs事業として展開した「りんごのたな」の取り組みについて報告する。

2. 「りんごのたな」設置までの経緯

2.1 誰ひとり読書から取り残さない図書館サービス

私が勤務する豊島区立中央図書館は、点字図書館であるひかり文庫を併設し、社会のバリアを日常的に意識できる環境にある。そうした中で、プリント・ディスプレイへの開かれたサポート、すなわち「誰ひとり読書から取り残さないサービス」の必要性を強く意識したのは、2018年のオーテピア高知声と点字の図書館訪問や、同年出版の『図書館利用に障害のある人々へのサービス』¹⁾で「りんごの棚」という資料提供の方法を知ったことが契機である。そこで、当館のサービス課題が区民の課題と直結していることを確信し、多様な子どもたちに読書の楽しさを届ける持続的で実効性のあるサービスを具現化したいと考えるようになった。

2.2 読書バリアフリー法とパンデミック下の課題

2019年6月「読書バリアフリー法」（視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律）が施行され、誰もが図書館サービスを受けられる環境の整備が早急な課題となった。この法整備を受け、持続可能な仕組みづくりを検討する過程で、すぐに「りんごのたな」から始まる新たな資料提供サービスの構想が浮かんだ。

しかし、年明けに新型コロナウイルス感染症が拡大し、緊急事態宣言の発出に伴い、図書館は臨時休館を余儀なくされた。そして私は、中央図書館から巣鴨図書館へ2年間異動することとなった。一斉休校による子どもの家庭滞在時間の増加が報じられる中、図書館として何ができるかの模索が始まった。そして接触・滞在時間短縮策として「司書が選んだ年齢別お楽しみセット」の貸出を始めると、1日で200冊を超える児童書が貸し出され、本が読める喜びの声が多数寄せられた。子どもと子どもを取り巻く大人が、いかに本を待ち望んでいたかを目の当たりにし、心に深く刻み出た事となった。この時の経験は、誰もがいつでも読書を楽しめる環境として「りんごのたな」の設置を実現させたいという思いを強く後押しし、今も「りんごのたな」の展開を考える上で揺るぎない原点となっている。

2.3 豊島区と図書館とSDGs

2020年7月豊島区は内閣府より「SDGs未来都市」と「自治体SDGsモデル事業」のダブル選定（東京都初）を受け、同年10月「誰一人取り残さない」社会の実現を目指す「としまSDGs都市宣言」を制定した。これを踏まえ、「豊島区立図書館基本計画（第二次）」（2022-2026）では、「誰一人取り残さない、誰もが主役になれるまち」を理念に掲げた。図書館は「SDGs未来都市」の公共図書館として、一人ひとりの状況に合った利用方法に対

応できる、包摂的なダイバーシティ（多様性）を備えた図書館を目指すことを公表している。

2.4 「りんごのたな」設置と理念の実現

豊島区における「りんごのたな」設置は、2021年4月巣鴨図書館のSDGs事業として「インクルーシブな読書環境の整備とりんごのたなの設置」を提案したことに始まる。これは、読書バリアフリー法による環境整備がSDGsの「誰ひとり取り残さない」理念と直結するためである。概要、設置場所、予算、役割を説明し、「コロナ禍だからこそできるサービスとして皆で取り組みたい」という思いは職員の共感を得て、中央図書館からも承認された。当初3か月は私が担当し、10月からは全員で分担作業を行い、2022年1月5日に予定通り巣鴨図書館への設置を達成した。

2022年4月に再び中央図書館へ異動し、「SDGs未来都市」のダイバーシティを体现する「豊島区制90周年事業」に関わった。この事業を通して、「りんごのたな」が図書館基本計画（サブ理念「誰一人取り残さない、誰もが主役になれるまち」の理念）を軸に区民の課題解決につながる意義を再認識した。そして、約3か月の期限で「りんごのたな」の設置が可能なら、事業の余剰金が活用できると打診を受け、急きょ計画を前倒して、2023年3月31日に中央図書館にも設置が実現した。短期間でもできると判断したのは、巣鴨図書館での実践経験から、バックキャストिंगでのプロセスを描けたからだ。

3. 「りんごのたな」の環境設計と資料構成

中央図書館の「りんごのたな」は、巣鴨図書館での反響を受け、効果的な要素は継承し、改善点を反映させて設置した。名称を平仮名表記としたのは、中学3年で初出する「棚」の漢字を避け、読みやすく、インクルーシブな環境を提供する意図がある。特に重視したのは、車椅子ユーザーにも届く棚の高さ、くつろいで読める絨毯や小机、スタッフの目が届き、非常口近く安全で落ち着ける場所の選定である。棚は職員の手作りだ。製作に要する時間を考え、資料を想定して設計し、真っ先に製作を依頼した。温かみのある木製で、見出し板には特別な仕掛けが施されている。オリジナルロゴマークは、色の視認性と配色のバリアフリーに配慮して同僚がデザインした。棚周りの



▲「りんごのたな」（豊島区立中央図書館）

季節の装飾は、フェルトや毛糸でスタッフが手作りしている。誰もが気軽に多様な読書の形と出会える場所として、あえて「障害」という言葉は揭示せず、包摂性を重視した空間づくりを心がけている。

「りんごのたな」には、布の絵本、大きな文字の本、LLブック²⁾（やさしく読みやすい本）、さわる絵本、手話付き絵本、多様な点字資料、マルチメディアDAISY図書、多言語電子絵本、手話DVDなど、装備も工夫したさまざまな資料を定期的に入れ替え、配置している。リーディングトラックや読書ルーペなどの読書補助具は、使い方の説明を添えて自由に体験できるようにした。「やさしい利用案内」のほか、保護者向けに学びのシート、教育・発達支援情報も発信している。



▲読む楽しさが広がる「読書補助具」（豊島区立中央図書館）

4. 多様な利用者層とアクセシブルな資料の効果

「りんごのたな」は、当初、特別なニーズのある子どものためのサービスを主目的としていたが、想定を超える多様な利用者層に、子どもだけのサービスではないとすぐに意識の転換を迫られた。大きな文字の本は、小学生から高齢者、外国につながりのある方まで利用者が多様である。ロービジョンの中学生が「同級生と同じ本が読める」と喜ぶ声も寄せられた。学習の跡がうかがえる漢字の本の開き筋や「思ったより軽いのでリピート

で借りる」といった感想から、実用性が確認されている。さわって楽しむ本は乳幼児に人気で、開設初日に全冊貸出され、慌てて追加購入するほどの反響があった。マルチメディアDAISY図書は、「ハイライトに合わせて声を出して読めるので満足そうだ」という感想がある一方、利用上の配慮や操作性の課題も明らかになった。布絵本は障害の有無に関わらず人気である。片麻痺の機能訓練に使う大人の方や、特性のために図書館利用が難しかった子どもが楽しみを味わえた事例、運動障害のある子どもが仰向けの楽な姿勢で布の絵本に触れられる喜びを保護者から伝えられた事例などがある。また、読書補助具もよく利用されている。

「りんごのたな」には、乳幼児から高齢者、障害のある方、日本語を母語としない外国につながる方など、さまざまな背景を持つ方が訪れる。教育関係者や大学生など、多方面から関心が寄せられている。多様な利用者のエピソードに触れるたび、読書困難な当事者の視点に気づきを得る。誰もが自分に合った読書のスタイルに出会い、読む体験を通して、生活や心に価値をもたらすことが「りんごのたな」の役割ではないかと考える。高次脳機能障害当事者の方が「新聞で『りんごのたな』の存在を知り、とても勇気づけられた」と話しに来てくださった。この言葉は必要とする方へ情報を届けることの重要性を再認識させ、進むべき道を照らす道標となっている。

5. 発展的拡充と今後の課題

2023年12月には「りんごのたな」のトライアル・ステップアップの棚として、中央部にバリアフリーコーナーを増設した。豊島区の高い外国人比率にも対応するため、10言語の利用案内をそろえ、多言語資料や汎用性の高い日本語学習資料、LL



▲「バリアフリーコーナー」の増設（豊島区立中央図書館）

ブック、オーディオブックなど、アクセシブルな資料の種類を広げている。「りんごのたな」は区内全館設置に向け、図書費に「読書バリアフリー」費目を明記するなど発展的拡充が進んでいる。

また、団体貸出用の読書バリアフリーセットを作り、学校司書へのレクチャーを行い、学校図書館との連携を強化している。さらに、館外で「りんごのたな」体験会を実施し、アクセシブルな資料の存在と図書館サービスの周知に努めている。



▲デフリンピック×「りんごのたな」体験会（あうるすぽっと）

昨年、スウェーデンの図書館司書が当館の「りんごのたな」を訪れ、「スウェーデンと理念が同じだ」と共感の言葉を寄せてくださった。日本では「やさしく読みやすい」形の資料出版が社会的なスタンダードになることを目指しているが、アクセシブルな資料の不足は大きな課題だ。また、豊島区では来館困難者へ資料の配送を行っているが、潜在的な利用者へのアウトリーチには課題が残されている。

「りんごのたな」は、海外の先進事例を踏まえ、単なる設置を目的とするのではなく、インクルーシブな環境づくりを推進するための基盤として、多様な資料や活動と連携し育んでいくことが期待される。その過程では、失敗の共有が新たな価値を生み、同僚や利用者と共に道を創っていることを日々実感する。こうした活動を通じて、「りんごのたな」は、区民一人ひとりの読書の形に応えるダイバーシティの公共図書館実現に貢献すると考えている。

注

- 1) 日本図書館協会障害者サービス委員会編 日本図書館協会 発行 2018年（2021年補訂版）上・下巻
- 2) LLはスウェーデン語の「Lättläst」の略（いしかわ のりこ：豊島区立中央図書館）

[NDC10：016.2136

BSH：1. 豊島区立図書館 2. 障害者サービス]

れふあれんす

三題噺

連載その三百二十四

南アルプス市立図書館の巻

南アルプス市立図書館の レファレンス事例



望月静香

山梨県南アルプス市は、山梨県の西側、南アルプス山麓に位置する美しい自然に囲まれた地域です。2003（平成15）年4月1日に、八田村、白根町、芦安村、若草町、櫛形町、甲西町の4町2村が合併して南アルプス市となりました。南アルプス市では、中央図書館、芦安分館、八田ふれあい図書館、白根桃源図書館、わかさ図書館、甲西図書館の5館1分館を運営しており、合併前の旧町村ごとにそれぞれ図書館が設けられています。地域ごとに図書館があることで、アクセスの利便性が高く市民の皆さんが自宅の近くで気軽に本に触れ合うことができるため、家族連れや小さいお子さんにも多く利用いただいています。市内全館を統括する中央図書館は、櫛形生涯学習センター内に併設されており、近代に活躍した南アルプス市ゆかりの人々を紹介する「南アルプス市ふるさと人物室」も運営しています。

レファレンス専用カウンターはありませんが、各館の貸出カウンターで受け付け、回答しています。お子さんから日常生活の中の素朴な疑問を多くいただきますので、今回はそんなかわいらしい事例も含め三つご紹介します。

その1

ねこが背中から落ちて足で着地できるのはなぜか知りたい。

家でねこを飼っているというお子さんから、お尋ねいただきました。自館システムで「ねこ ふしぎ」「ねこ図鑑」と検索し、ヒットした本やその近くの書架を確認しました。児童書『なぜ？の図鑑 ネコ』（今泉忠明／監修 学研プラス 2017）という本に「なぜ、せなかから落ちて足で着地できるの？」という章がありその中に「ネコが高いところからせなかを下にして落ちて、ちゃんと着地できるのは、落ちているとちゅうでも、どこが地面かが、いっしゅんでわかるバランスかんかくのよさと、空中でもひねって回転できるからだのおかげです。」(p.38-39)と記載がありました。また、背中から落ちたねこが、足で地面に着地する様子をコマ送りの写真で解説し

ている図も掲載されていました。児童書で回答に使えそうな資料が他に見当たらなかったため、一般書も確認しました。一般書『猫の教科書』（CAMP NYAN TOKYO／監修 ナツメ社 2022）、『ネコの博物図鑑』（サラ・ブラウン／著、角敦子／訳 原書房 2020）にも同じ内容の記載があったので、あわせてご利用いただきました。

お子さんからのレファレンスの場合なるべく児童書で回答したいのですが、児童書だけで複数の資料を提示することが難しい場合が多いです。その際は一般書もあわせてお渡しして、司書がその場で一緒に読んであげたり、保護者の方とじっくり調べていただいたりしています。一つの情報だけでなく複数の資料にあたって内容をより確かなものにするという経験をしてほしいと思います。

その2

アボカドが動物にとって危険なのはなぜか、また栄養素を知りたい。

アボカドがペットにとって危ないという情報を聞いた方から、本で詳しく調べたいとのことでお尋ねいただきました。自館システムで「アボカド」と検索し、書誌データを見て求める情報が掲載されているような本を確認しました。『アボカドの歴史』（ジェフ・ミラー／著、伊藤はるみ／訳 原書房 2021）、『アボカドバンザイ！』（地球丸 2006）にアボカドの栄養に関する記載がありました。18%が脂質だが、そのうちの80%がオレイン酸やリノール酸という不飽和脂肪酸で、血中の悪玉コレステロールを減らす成分であること、その他にビタミン、食物繊維、カリウムも豊富であることがわかりました。念のため栄養事典も検索し、『食品の栄養とカロリー事典 第3版』（奥嶋佐知子／監修 女子栄養大学出版社 2022）もあわせてご利用いただきました。

アボカドに関する本には、栄養素の記載はありましたがアボカドが動物にとって有害であるということが分かりませんでした。そこで改めて自館システムで「植物毒」と検索してヒットした本と、その近くの書架を確認

しました。『ほんとうはびっくりな植物図鑑 ありふれた草花の秘密がおもしろい!』(石井英男/文、稲垣栄洋/監修、下間文恵/絵 SBクリエイティブ 2021)に「アボカドの実は、人間はおいしく食べられ、健康にもよい食べ物ですが、人間以外の動物には猛毒となる「ペルシン」という成分が含まれています。特に、インコやオウム、文鳥などの鳥はペルシンに弱く、食べると中毒を起こし、最悪の場合、死んでしまいます。」(p.128)と記載がありました。『人もペットも気をつけたい 園芸有毒植物図鑑 増補改訂版』(土橋豊/著 淡交社 2022)には、「果実(特に未熟果)、種子、葉などにはペルシン(persin)が含まれていますが、健康被害における作用機作についてはよくわかっていません。(中略)人以外の動物において、摂取すると下痢、嘔吐、呼吸困難を引き起こし、死亡するおそれもあります。」(p.265)と記載がありました。『必ず知っておきたい 犬と猫に危険な有毒植物図鑑』(土橋豊/著、高島一昭/監修 緑書房 2025)にも同様の記載があり、より詳しく誤って食べてしまった場合の症状や対応が書かれていたので、あわせてご利用いただきました。このように、みなさんからよせられた疑問をお調べする中で、意外な事実を知ることができるのもレファレンスの面白さだと感じています。

その3

なぜ中央図書館に東京タワーの模型があるのか知りたい。

南アルプス市立中央図書館のテラスに、七十五分の一サイズ(4m44cm)の東京タワーの模型が展示されています。その模型を見たお子さんからお尋ねいただきました。東京タワー設計者が榊村(現在の南アルプス市曲輪田)出身の内藤多伸博士であるということは、南アルプス市内ではよく知られています。ご質問いただいたのは市外から初めて図書館にきてくれたお子さんでした。先に紹介した「南アルプス市ふるさと人物室」で内藤多伸展を開催



したことがあり、図書館でも関連資料を収集しているため、その中からいくつかをご紹介します。

まず、榊村生涯学習センターがオープンした年である1999年7月23日の山梨日日新聞に「東京タワー榊村に出現」という記事がありました。「内藤さんは同タワーの設計などで知られ、日本を代表する建築家。非常に勉強熱心だったことから、「内藤氏の志に習い、センターの象徴にしよう」と設置する運びになった。」との記載がありました。

その他にも、内藤博士の著書に自身のふるさとについて記述している文章がありました。著書『建築と人生』(内藤多伸/著 鹿島研究所出版会 1966)には、「私の生まれた榊村(榊形町)は甲府から西方に当たる高尾山(徳見神社)へ行く道で知られた中巨摩郡の倉庫町に近く、ここから西へ村道を上りつめたところの曲輪田(くるわだ)という部落である。」(p.1-2)と記載がありました。

調べていくうちにお子さんが東京タワーや内藤博士に興味を持たれたため、『東京タワーをつくった人 内藤多伸』(江宮隆之/原作、花松あやか/漫画、内藤多四郎・山田真/監修 南アルプス市 2024)もあわせてご紹介しました。この本は内藤多伸展の開催時に図書館が製作した伝記で、博士の生涯をマンガで描いており、小中学生にもわかりやすい内容になっています。後半の資料編には、内藤博士が設計した建物の写真や、博士が残した言葉などが掲載されています。東京タワーの設計者として有名な内藤博士ですが、中部電力MIRAI TOWER(旧名古屋テレビ塔)、通天閣(二代目)、別府タワー、さっぽろテレビ塔、博多ポートタワーなど多くの塔を設計したことから「塔博士」と呼ばれていたこともお伝えしました。

内藤博士が残した言葉に、「積み重ね つみ重ねてもまたつみかさね」があります。質問をしてくれたお子さんも、小さな疑問をそのつど調べ解決し、内藤博士のように勉強熱心で何事にも一生懸命取り組む人になってほしいと願っています。このマンガは「南アルプス市電子としょかん」(https://web.d-library.jp/m_alps/g0101/top/)でも公開しているので、多くの方に内藤博士の功績をご覧いただければ幸いです。

地域に密着した身近な図書館として、これからも小さなお子さんから一般の方まで幅広い年代のみなさんの疑問解決のお手伝いをしていきたいと思っています。

■レファレンス協同データベース(南アルプス市立図書館)

https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=pro_view&id=2310126

(もちづき しずか:南アルプス市立図書館)

[NDC10:015.2 BSH:レファレンス ワーク]



お宝紹介! 第253回

大東文化大学60周年記念図書館

「中村屋のボース」との深い縁

—『ラース・ビハーリー・ボース関連資料』目録—

大東文化大学60周年記念図書館

1. はじめに

大東文化大学は1923（大正12）年に設立された大東文化学院を前身とし、1953（昭和28）年に校名を大東文化大学と改称しました。「東西文化の融合をはかり、新たな文化の創造をめざす」を建学の精神に掲げ、人文・社会科学全領域だけでなく一部体育・保健衛生系の領域をカバーする8学部20学科、大学院7研究科を擁する総合大学として、板橋キャンパス（東京）と東松山キャンパス（埼玉）に併せて約12,000名の学生が学んでいます。

今回紹介する貴重資料は東松山キャンパスにある60周年記念図書館に所蔵しているものになります。当館は地上4階、地下2階のレンガ造りの建物として1986（昭和61）年に開館し、現在約650,000冊を所蔵しています。

2. ラース・ビハーリー・ボース関係資料

本学国際文化学科・石田英明名誉教授が2000（平成12）年春にインド滞在中、インド独立運動の志士たちの記念館を運営しているインド人男性が訪ねてきて、ラース・ビハーリー・ボースの遺品を展示したいので、日本にいる遺族の方に連絡を取って遺品を譲り受けたい、という要望を受けたのが事の発端であります。

帰国後、ご遺族に面会したところ、遺品は空襲でほとんど焼けてしまったうえ、すでにカルカッタ（当時）の記念館に寄付しているので何もないとのことでしたが、疎開させて空襲を免れた家族の思い出の手紙や写真が残っていて、それらを将来的にどのようにするか迷っているとのことでした。

実は1933（昭和8）年、大東文化大学の前身であ



る大東文化学院でボースは講演をしており、そのときの写真も遺品の中にありました。

深い縁を感じ、大東文化大学でお預かりしたいと申

し出たところ、ご快諾いただけたので、現在当館にて大事に保管しています。

今回紹介するのは、約500点ある資料の中の一部です。

3. ボースとは

ラース・ビハーリー・ボース（1886-1945）はインドの独立革命家で、スバス・チャンドラ・ボースと区別するため「中村屋のボース」とも呼ばれています。

イギリスの植民地になっていた祖国の独立運動において過激な活動を行い、1915（大正4）年に日本へ亡命し、孫文や頭山満と親交を持ちました。



▲ボースと俊子

このときボースを匿ったのが中村屋で、店主・相馬愛蔵の娘・俊子と結婚し、1923（大正12）年日本に帰化することになります。日本から祖国独立運動を繰り広げましたが、1945（昭和20）年1月21

日永眠。58歳でした。

悲願であるインド独立は、彼の死から2年後に達成されました。

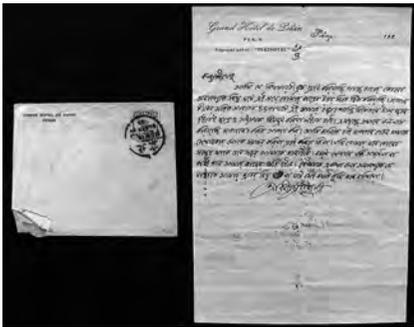
ちなみに、中村屋のインドカーリーはボースが伝えたものです。

4. 資料紹介

資料内容としては手紙、写真、蔵書、手記などが主であり、ほとんどが世界でここにしかないものであるため、インドから閲覧に来ることもあります。

●タゴールからの手紙、写真

ラビンドラナート・タゴールは、1913（大正2）年にアジア人初のノーベル文学賞を受賞しているインドの詩人であり思想家です。1924（大正13）年の手紙ではベンガル語で3度目の来日のサポートを要請しており、家族ぐるみで付き合いがあったことがわかります。



▲タゴールとボース一家、相馬夫妻

●観桜会招待状

1930（昭和5）年4月16日のいわゆる“桜を見る会”の招待状です。駐車場地図、喫茶所班番号等が同封されています。ボースは秋の観菊会にも呼ばれるなど、時の有名人でした。



●麻布新龍土町（潜伏先の一つ）

1916（大正5）年4月に犬養毅や大川周明など協力者たちへカーリーを振る舞ったときの一枚。



5. おわりに

今の日本では知名度が高くないボースではありますが、スーパーなどで目にするレトルトカレー「新宿中村屋インドカーリー」の由来を知っていたら、この紹介は成功です。今回取り上げませんでした。浜口雄幸や犬養毅からの書簡や、吉田茂や頭山満と一緒に写っている写真などもあり、今後も唯一無二のボース資料を大切に守り続けていきたいと思います。

■大東文化大学図書館ホームページ

<https://www.daito.ac.jp/research/library/>
機関リポジトリ

<https://opac.daito.ac.jp/repo/repository/daito/>

■参考文献

・中島岳志『中村屋のボース：インド独立運動と近代日本のアジア主義』白水社、2005
[NDC10：090 BSH：1.図書館資料 2.大東文化大学図書館]

図書館員のおすすめ本⑩7

現代「ますように」考 こわくてかわいい日本の
民間信仰

井上真史著 淡交社 2024 ¥1,500 (税別)

「明日の図書館イベント，成功しますように」。図書館員なら，誰しも願ったことがあるのではないだろうか。「ますように」とは，祈願と呼ぶにはちょっとりげさな，でも叶うといいなという人間のふわっとした願いのこと。本書はその願いの周辺を，北は青森から南は佐賀まで，著者が実際に足を運んで集めた民間信仰の観測記である。

著者の語り口はライトでポップ。実際にその信仰がいまも生きる地へ，一緒に旅をしているかのような気持ちになる。信仰の現場を，あるいは何だかわからない（参加している当事者でさえ，わけがわからない）祭を，ともに目撃したかのような心持ちにも。自分が実際に訪れたことがある場所なら，ことのほか強く共鳴するだろう。かつて訪ねたことがある恐山も掲載されている。会いたかったはずの黄泉の者とは会えなかった，あのときの感情や空気感までもが自分のなかに蘇った。

それにしても世の中にはなんと多種多様な祭や信仰があることか。カメラが壊れるほど砂をかけられる祭に，個性が爆発，行き着くところまで行ってしまった鬼が練り歩く伝統行事も紹介されている。「雨女が治りますように」(p.16-21) など，ふわっとしているはずの「ますように」だが，縁切り神社の絵馬にかかれば，人間の怨念，私怨のオンパレードだ。なんでそんな祭が？何故こんなことに？！気になったことはどんどん調べたい。そこはさすが，幼少期に民俗学の父・柳田國男と同様「神隠し未満現象に遭遇」(p.73) した著者。フィールドワークを基本に，文献や古くは江戸時代の史料からの考証を欠かさない。その姿勢が，読み手の探求心をこれでもかとくすぐってくる。

果たして，自分が住まう土地にはどんな民間信仰があるのか。図書館の郷土資料という名の，歴史，知識の森（沼？）に分け入って行きたくなる。そんなガイド役も果たしてくれる一冊だ。

（米田由紀子：鹿角市立花輪図書館）

「風の谷」という希望 残すに値する未来をつくる
安宅和人著 英治出版 2025 ¥5,000 (税別)

この本のインパクトは極めて大きい。これほど情報量が多く内容が広範な書籍は珍しい。確かに百科事典は情報量が多く，内容が広範であるが，知識の羅列であって文脈はない。この本には「風の谷」をつくるという一貫した文脈がある。

「風の谷」が目指すのは，インフラと経済的な基盤を備え，その土地固有の価値や自然との関係性を持った空間づくりである。「都市集中型の未来に対するオルタナティブ」をテクノロジーをうまく使い倒しながら作るというものである。

著者は知的生産のバイブルとして名高い『イシューからはじめよ 改訂版』（英治出版 2024）や『シン・ニホン』（ニューズピックス 2020）の安宅和人氏である。帯に「著者が人生をかけて挑む解くべき課題」とある通り，知の指揮者である著者が全霊をかけてまとめた交響曲のような本である。広範な個別研究に対する造詣とともに，全体を俯瞰できる安宅氏にしか成し得ない大作である。

データ分析のプロでもある安宅氏自らの解析や先行研究に裏付けされた論考には， unnecessary 形容表現は存在しない。存続可能 (viable) かつ持続可能 (sustainable) な疎空間を実現する条件について，これほど広範かつ体系的に深掘りした本はかつてない。平易な文体が非常に読みやすく，卓越した図化は芸術的ですからある。はじめから通読するもよい。数値やグラフに抵抗感がある読者は，読み飛ばしてもよい。

書籍や論文は作品である。科学的見地に立つなら，誰が執筆したか，誰が描いたかなどに関係なく作品主義でありたい。著者の華々しい経歴にとらわれず，この本の価値を冷静に判断すべきである。この本を読むことからはじめよ。「風の谷」の本当の意味を知りたいければ…。読みは始めることで今後，世界が向かうべき地平へ導く水先案内人に，あなたが出会えるものと確信する。

（星野 盾：沼田市教育委員会，

日本図書館協会認定司書第2026号）

図書館員のおすすめ本⑩

学校に行かなかった僕が、あのころの自分に今なら言えること

石井しこう著 大和書房 2025 ¥1,500 (税別)

学校に行けなくなったとき、「『人生詰んだ』と絶望」(p.2)した——。不登校を経験した著者は、その後、NPO法人に入り、「不登校の私が、どうしたら生きていけるのか」(p.4)をテーマに、400人以上の不登校経験者や保護者等に取材を重ねた。本書は、不登校の“先輩”の声をもとに、「不登校のころ聞きたかったこと」(p.3)を、過去の著者自身、そして同じように悩んでいる誰かに向けて綴られている。

「卒業できるか心配です」(p.24-25)「不登校だった『黒歴史』は消せませんよね？」(p.126-127)など、登校や進路に悩む子どもたちが抱える不安や孤独、そして言葉にしづらい思いが、丁寧にすくい上げられている。当事者のリアルな気持ちに寄り添う著者のまなざしはやさしい。

私自身、学校に行き渋る我が子にどう接すればいいか悩んでいたとき、本書に出会った。この本を読むと、息苦しい学校生活を生きた子ども時代の気持ちに引き戻され、我が子の気持ちに寄り添いたいと願っていたはずなのに、いつの間にか置き去りにしていたことに気づかされた。

不登校はさまざまな要因が複雑に絡みあって起こる場合が多いそうで「不登校の理由を、自分の言葉で語れるまでは『10年かかる』とも言われている」(p.22)る。何もできなかったあの頃を著者は「闘い」(p.63)だったと表現し、不登校の先輩である押井守映画監督は「あの時期に得たものが人生の原資になっている」(p.63)と振り返る。

悩みや聞きたいことをうまく言葉にするのは簡単ではない。誰かに尋ねるにはさらに大きな勇気がある。だからこそ、この本のような存在が必要なのだと思う。同じような経験をした人の話を読むことで、「安心のきざし」(p.4)が少しでも見つかるかもしれない。図書館に訪れる子どもや保護者のそばに、この本がそっと寄り添ってくれることを願う。

(島田佳代子：鎌倉市中央図書館)

大阪ことばの謎

金水敏著 SBクリエイティブ (SB新書) 2025 ¥950 (税別)

日本語の代表的な地域方言といえどと聞かれた際に、関西弁を挙げる人は少なくはないだろう。かくいう私自身、兵庫県で生まれ育ち、大学卒業後は大阪に移り、関西弁に囲まれた人生を送ってきた。それゆえに、テレビドラマや映画で非関西弁話者の俳優さんが、必死に関西弁を話す演技を目にする度に、言いたくてムズムズしてきた。「あなたの関西弁、終わっちゃうなー」ところが大阪に来て職場の先輩から衝撃の一言。「あなたのしゃべり方、なんか変やで」「…えっ??」

そんな関西弁の奥深さ、不思議な魅力の解明に真っ向から挑まれたのがこちら。タイトルにもあるように、そもそも関西弁と大阪弁は完全なイコール関係ではないのだ。近畿地方内さらには大阪府内でも起きている微妙な差について、旧国名による地域区分の時代から遡り、まとめられている。自称関西弁ネイティブ・スピーカーにとっても、目から鱗の情報の連続で、実に興味深い。

考察は歴史的研究にとどまらない。日本語学、特に役割語研究のバイオニアである著者の引き出しは幅広く、アクセント等の音声学的な見解から、言語データの実例としては村上春樹作品から『名探偵コナン』、さらには現役で活躍するお笑いタレントからナウい(!)アイドルまで豊富なデータが扱われ、一度は耳にしたことのあるフレーズ、その使われる背景やコミュニケーションスタイルまで奥深く考察されている。関西弁のものに一度は触れたことのある人であれば、誰もが手軽に、そして深く楽しめる関西弁研究の代表作といえる。

ところで4月から兵庫県に戻った私にとって、やはり大阪弁と微妙に異なる兵庫弁は居心地が良い。しかし時折大阪の癖が出てしまって、しまった、しまった鳥倉千代子…あれ?通じない?!このギャップは地域差かはたまた年代差か……?

(城内 涼：関西学院中学部)

[NDC10:019.9 BSH:書評]

図書館員の本棚

図書館と居場所

未来の図書館研究所編集

東京 : 未来の図書館研究所

2025. - 204p : 19cm

(未来の図書館研究所調査・研究レポート 第8号)

ISBN : 978-4-88367-411-4 : ¥2,000 (税別)

NDC10 : 010.4

BSH : 図書館

本書は、株式会社未来の図書館研究所が2024年11月に開催したシンポジウム「図書館と居場所」の講演録等を収録した、同研究所の「調査・研究レポート」シリーズの最新刊である。

近年、「居場所づくり」という言葉をよく耳にするようになった。4割近い人が何らかの孤独感を感じている、子どもの自殺や不登校が過去最多となったなどの調査結果も報じられる中、さまざまな居場所に関する取り組みが官民間問わず行われているようだ。「図書館と居場所」というシンポジウムも、図書館を子どもの居場所にしたいとの声が増えつつあることがきっかけとなったという。

本書前半は、同シンポジウムの趣旨説明と有識者2名による講演、質疑の記録である。最初の講演は青山鉄兵氏(文教大学)による「子ども・若者の居場所と図書館」。社会教育等が専門で、子どもの居場所づくりに関する政府の部会委員も務める青山氏が、「居場所」が社会的関心を集める背景、居場所と感ずる条件や居場所の多様性、図書館が居場所となることの意味について論じている。図書館は誰でも使える、ユニバーサルな場所であり、意図的かを問わず、これまで誰かの居場所となってきたものの指摘に納得する人も少なくないだろう。

また、複数の図書館で文化・学びの場づくりに携わってきた森田秀之氏(株式会社マナビノタネ)による講演「居場所づくりの実践から」では、森

田氏が良い居場所をどのように捉え、どのように場をデザインしてきたのかが実例と共に紹介されている。都城市立図書館(宮崎県)の「場づくり」チームのコンセプトも興味深い。直接的なサービス提供ではなく、青少年や高齢者、障害を持つ人が自律的な活動ができるよう場を作ることに重点を置いているという。

詳細は本書を御覧いただきたいが、両者の指摘には、居場所としての図書館づくりを考えるとき、図書館の緩さや余白をどこまで許容するか(できるか)を一つの論点として挙げている点に共通点を見いだせるだろう。森田氏はこれを「ゆるゆる」(緩さで許せる)という言葉で表現し、空間の境、ルール、権利・責任、属性、目的・機能、価値付けの六つの視点から見たゆるゆる度で良い居場所とは何かを検討する。青山氏も、図書館で本を借りて読む以外の余白やすき間を作ることで、図書館をあまり利用しない人にも居場所となり得るという。もちろんすべてを緩めることは難しく、図書館の専門性とのバランスも問題となるだろう。居場所は主観的なもので、誰かに作られるものではないという居場所づくりの限界も指摘されている。しかし、そうした点も含めて、場の緩さをどのようにデザインするかという視点を持つことこそが必要だという気付きを与えてくれる。

そのほか、本書の後半には図書館づくりや図書館研究に携わる3名の有識者の論考等が掲載されている。



居場所=行きつけとなる図書館、地域の誇りや地域愛を生み出すオンリーワンの建物を、地域の人との対話や徹底的な事前調査などを経て作り上げていく過程を細やかに描写した建築家の新居千秋氏(新居千秋都市建築設計)の論考に、図書館の所蔵をめぐる四つの論点(需要か質か、主題の多様性、対立する意見間の中立性、書籍市場との関係)に沿って、公共図書館の所蔵傾向をデータを基に分析・評価した貴重な研究成果を紹介した大場博幸氏(日本大学)の講演録。そして最後は磯部ゆき江氏(未来の図書館研究所)による広域連携による電子図書館導入例として2024年に開始された岡山県下の二つの取り組み、「つやまエリアデジタルライブラリー」および「おうちデジタルライブラリー」を取り上げた論考である。磯部氏の論考はまさに人口減少による図書館サービス縮小、読書環境の地域格差等の問題が懸念される今後の対応策として期待される取り組みである。関係者へのインタビューに基づきその実態を具体的に紹介した本稿は、先行例を知るための有用な情報となるだろう。

さまざまな社会課題を受けて、図書館の役割やあり方にも変化が求められている。本書を手掛かりに図書館だからこそ果たせる役割とは何かを改めて考えていきたい。

(舟越瑞枝: 国立国会図書館)

図書館員の本棚

図書館にゲームを！

図書館の新しい可能性

日向良和, 高倉暁大, 福田一史編著

東京 : 日外アソシエーツ

2025. - 270p : 21cm

ISBN : 978-4-8169-3048-5 : ¥2,200 (税別)

NDC10 : 014.7 : 015

BSH : 非図書資料 ; 遊戯

情報収集の大部分がインターネット上で行われ、電子図書館など来館しなくても利用できるサービスが発展する中、「場としての図書館」の意義は何か。副題の「図書館の新しい可能性」という言葉の通り、本書はゲームの収集・提供について論じながら図書館の社会的役割を再考する内容となっている。

本書は五つの章で構成されている。第1章では市区町村立、都道府県立、国立国会図書館、大学・学校という館種ごとのゲームに関する論点を整理し、ゲームも人類の文化の成果として従来の図書館資料と同様に収集・保存されるべきであること、ゲームはコミュニケーションを生み出し社会の安定を促す福祉的役割を持ち得ることが述べられている。第2章ではゲームを提供している国内外の図書館の事例が紹介されている。国内ではボードゲームを使ったイベント企画の事例が多く取り上げられているが、ビデオゲームの貸出が行われているスウェーデン・ハルムスタードの図書館や、ガイドラインを設けて館内利用を実現しているアメリカ・ソルトレイクシティの図書館のように、海外には普段からデジタルゲームができる公共図書館の事例もある。第3章は実践的な内容で、著者の実体験に基づくボードゲーム企画の立ち上げ方、ゲームを図書館資料として整理するための目録作成、博物館におけるゲームの

「展示」が取り上げられている。ゲームの展示については、実際にゲームを体験できる「プレイブル展示」がゲーム愛好家からは求められるが、プレイすることが目的になってしまうと文化や歴史を伝えるという博物館の目的とは相容れなくなってしまう恐れがあると指摘されている。第4章は、ゲームの知的財産権と図書館の関係を解説している。複雑に感じられる権利の規定の一つずつ確認し、クリエイターの権利保護と図書館でのゲームの利用提供が両立することを示している。第5章では、教育的な機能を持った「シリアスゲーム」の活用、TRPGがASDのある子どもたちにもたらした変化、視覚障害のある方と一緒にできるゲーム、ゲーム・ツーリズムと図書館の関係、MLA連携の課題と可能性といった多様な観点から、あらためて図書館におけるゲーム収集・利用提供の意義を確認している。巻末には用語索引に加えゲームタイトル索引がついていて、個別のゲームの導入事例を探することができる。

図書館にゲームを取り入れる上で検討すべき点として、①ゲームが図書館資料として認められるか、②従来の資料にはない要素の多いゲームをどのように整理・保存するか、③プレイブルな形で提供できるかという3点に分けて本書における論点を整理したい。①に関しては、第3章第3節で引用されている「ドラゴ

ンクエスト」シリーズの堀井雄二氏のコメントにあるように、かつてネガティブな影響を人々に与えると考えられていたゲームが文化として認められるようになってきている。ゲームは文化資源であり、映画や音楽、マンガといった図書館資料の延長線上にある。②については、前述の目録作成に加え、物自体の管理の問題がある。部品が多く壊れやすいボードゲームは、長期の保存を担う役割と利用と割り切って提供する役割とを図書館間で分担することも必要と述べられている。③は②と関係するが、特にデジタルゲームの提供が国内ではまだ進んでいない。デジタルゲームの収集は国立国会図書館が納本制度に基づいて行っているものの、その利用が厳しく制限されている点への指摘もある。

本書において興味深く感じたのが、図書館資料としてゲームを収集すべき理由の一つとして、ゲームの持つストーリーが社会性や共感性を育むことに注目している点である。ゲームに限らず、必ずしも知識や情報を得るためではない資料も図書館は昔から提供してきた。人々の文化的な生活を支え、新たに生み出された文化を未来へ残すという図書館の役割が、ゲームの収集・利用提供の問題を考えることによって再確認されるのではないだろうか。

(菅野梨夏^{菅野}: 国立国会図書館)



『図書館雑誌』バックナンバーのご案内

(価格は税込み。各号の在庫状況については、出版販売係 ☎03-3523-0812に直接お問い合わせください)

- ◆2021年1月号 (Vol.115 No.1) 特集=トピックスで追う図書館とその周辺 1,026円
- ◆2021年2月号 (Vol.115 No.2) 令和2年度(第106回)全国図書館大会和歌山大会ハイライト 1,026円
- ◆2021年3月号 (Vol.115 No.3) 特集=東日本大震災から10年 1,026円
- ◆2021年4月号 (Vol.115 No.4) 特集=SDGsと図書館 1,026円
- ◆2021年5月号 (Vol.115 No.5) 特集=図書館員養成100周年 1,362円
- ◆2021年6月号 (Vol.115 No.6) 特集=図書館と公民館との連携を考える 1,026円
- ◆2021年7月号 (Vol.115 No.7) 特集=健康・医療情報のリテラシー 1,026円
- ◆2021年8月号 (Vol.115 No.8) 特集=図書館の話題アラカルト 1,362円
- ◆2021年9月号 (Vol.115 No.9) 特集=地域資料のいまとこれから 1,026円
- ◆2021年10月号 (Vol.115 No.10) 令和3年度(第107回)全国図書館大会山梨大会への招待 1,026円
- ◆2021年11月号 (Vol.115 No.11) 特集=国立国会図書館のデジタルシフト 1,026円
- ◆2021年12月号 (Vol.115 No.12) 特集=コロナ後の学校図書館へ/
小特集=IFLA2021オンライン大会レポート 1,362円

*

- ◆2022年1月号 (Vol.116 No.1) 特集=トピックスで追う図書館とその周辺 1,026円
- ◆2022年2月号 (Vol.116 No.2) 令和3年度(第107回)全国図書館大会山梨大会ハイライト 1,026円
- ◆2022年3月号 (Vol.116 No.3) 特集=図書館と命名権(ネーミングライツ) 1,026円
- ◆2022年4月号 (Vol.116 No.4) 特集=広がる広げる 子どもの読書環境としての公共図書館の今 1,026円
- ◆2022年5月号 (Vol.116 No.5) 特集=電子書籍と公共図書館-非来館型サービスとしての電子図書館 1,362円
- ◆2022年6月号 (Vol.116 No.6) 特集=図書館の広報を考える 1,026円
- ◆2022年7月号 (Vol.116 No.7) 特集=図書館の話題アラカルト 1,026円
- ◆2022年8月号 (Vol.116 No.8) 特集=認知症にやさしい図書館を目指して 1,362円
- ◆2022年9月号 (Vol.116 No.9) 令和4年度(第108回)全国図書館大会群馬大会への招待 1,026円
- ◆2022年10月号 (Vol.116 No.10) 特集=大学にある児童図書館(室) 1,026円
- ◆2022年11月号 (Vol.116 No.11) 特集=図書館と個人文庫・文学館 1,026円
- ◆2022年12月号 (Vol.116 No.12) 特集=「情報活用能力」-学校教育と図書館の未来をつなぐ/
小特集=IFLAダブリン大会レポート 1,362円

*

◆2023年1月号 (Vol.117 No.1)	令和4年度(第108回)全国図書館大会群馬大会ハイライト	1,026円
◆2023年2月号 (Vol.117 No.2)	特集=トピックスで追う図書館とその周辺	1,026円
◆2023年3月号 (Vol.117 No.3)	特集=図書館の空間をデザインする	1,026円
◆2023年4月号 (Vol.117 No.4)	特集=コロナ後の図書館員の学び・交流	1,026円
◆2023年5月号 (Vol.117 No.5)	特集=県立図書館は今	1,362円
◆2023年6月号 (Vol.117 No.6)	特集=既存図書館のリニューアル	1,026円
◆2023年7月号 (Vol.117 No.7)	特集=図書館の話題アラカルト	1,026円
◆2023年8月号 (Vol.117 No.8)	特集=図書館と展示-資料から広がる世界	1,362円
◆2023年9月号 (Vol.117 No.9)	特集=図書館のビジュアルアイデンティティ	1,026円
◆2023年10月号 (Vol.117 No.10)	令和5年度(第109回)全国図書館大会岩手大会への招待	1,026円
◆2023年11月号 (Vol.117 No.11)	特集=表現する図書館員-書くことのすすめ	1,026円
◆2023年12月号 (Vol.117 No.12)	特集=2023年学校図書館の今 そしてこれから/ 小特集=IFLA ロッテルダム大会レポート	1,362円

*

◆2024年1月号 (Vol.118 No.1)	特集=トピックスで追う図書館とその周辺	1,026円
◆2024年2月号 (Vol.118 No.2)	令和5年度(第109回)全国図書館大会岩手大会ハイライト	1,026円
◆2024年3月号 (Vol.118 No.3)	特集=書店×図書館の可能性	1,026円
◆2024年4月号 (Vol.118 No.4)	特集=移動図書館のいま	1,026円
◆2024年5月号 (Vol.118 No.5)	小特集=図書館は生成AIをどのように活用できるか	1,362円
◆2024年6月号 (Vol.118 No.6)	特集=座談会 中堅図書館員しごとを語る -あらたに図書館員になった方たちへ	1,026円
◆2024年7月号 (Vol.118 No.7)	特集=図書館の話題アラカルト	1,026円
◆2024年8月号 (Vol.118 No.8)	特集=図書館における「ゲーム」	1,362円
◆2024年9月号 (Vol.118 No.9)	特集=まちライブラリーの今	1,026円
◆2024年10月号 (Vol.118 No.10)	令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会への招待	1,026円
◆2024年11月号 (Vol.118 No.11)	特集=シン・デジタル・ライブラリー-オープンサイエンス時代の 大学図書館	1,026円
◆2024年12月号 (Vol.118 No.12)	特集=つなぎ手としての学校図書館-情報活用能力育成の アспект	1,362円

*

◆2025年1月号 (Vol.119 No.1)	特集=トピックスで追う図書館とその周辺	1,026円
◆2025年2月号 (Vol.119 No.2)	令和6年度(第110回)全国図書館大会長崎大会ハイライト	1,026円
◆2025年3月号 (Vol.119 No.3)	特集=多文化共生に資する図書館	1,026円
◆2025年4月号 (Vol.119 No.4)	特集=市民提案による図書館との協働	1,026円
◆2025年5月号 (Vol.119 No.5)	特集=「そと」からの図書館長による新たな取り組み	1,362円
◆2025年6月号 (Vol.119 No.6)	特集=公民館等図書室のさまざまなかたち	1,026円
◆2025年7月号 (Vol.119 No.7)	特集=子どもの読書活動推進計画と図書館	1,026円
◆2025年8月号 (Vol.119 No.8)	特集=戦後80年と図書館	1,362円
◆2025年9月号 (Vol.119 No.9)	令和7年度(第111回)全国図書館大会愛媛大会への招待	1,026円
◆2025年10月号 (Vol.119 No.10)	特集=孤独に寄り添う図書館	1,026円

季刊『現代の図書館』刊行のご案内

*現代の図書館編集委員会編 B5判・平均52ページ・定価：1,430円(税込)

・Vol.62 No.1 (2024年3月刊行)

特集：デジタル田園都市国家構想と図書館

田園都市と図書館－これからのデジタル化の流れの中で……………西村幸夫
明治・大正期の「田園都市」のなかの図書館
……………杉山里枝
「スマート図書館」の実現を目指して－デジタル田園都市国家構想交付金で実現したこと……………深田正範
デジタル田園都市国家構想交付金デジタル実装タイプマイナンバーカードを利用した電子図書館サービス……………矢島征幸
「チームとしての学校」に公立図書館が加わること－企画・予算から運営まで……………桃原勇二，岡田優子
投稿
NCR2018は司書課程でどのくらい教えられているのか……………木村麻衣子，宮田洋輔，金井喜一郎，橋詰秋子

・Vol.62 No.2 (2024年6月刊行)

特集：LGBTQへの情報提供サービス

レズビアンコミュニティ資料とアーカイビング－日本の現状と課題……………杉浦郁子
トランスの人々の交差的な経験のアーカイブ化に向けて……………武内今日子
「LGBTQコミュニティ・アーカイブ」構築に向けて－プライドハウス東京「文化・歴史・アーカイブ」チームの取り組み……………山縣真矢
ホモサウルス Homosaurus の使命と歴史，現在の多言語化プロジェクト……………K. J. ローソン，訳：須永和之
学校図書館職員雇用状況調査（自治体）……………日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員会
学校図書館職員雇用状況調査（自治体向け）報告……………日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員会

・Vol.62 No.3 (2024年9月刊行)

特集：平安時代の文学作品と図書館

相愛大学図書館「春曙文庫」の蔵書とその最新研究……………阿尾あすか
春曙庵主田中重太郎－その人となりと蔵書形成……………山本和明
天理図書館と『源氏物語』古典籍資料－蒐集の経緯・名品の紹介……………岡嶋偉久子
日本古典文学作品とAI・機械翻訳について……………浅川楨子
デジタル言語資源－『日本語歴史コーパス』の活用……………須永哲矢
投稿
高等学校におけるラーニング・commonsの現状と課題－先行的に取り組みが進んでいる高等学校を対象とした調査から……………須藤崇夫，野口武悟

・Vol.62 No.4 (2024年12月刊行)

特集：タイアップする図書館

読書とスポーツの異業種連携協力モデル－台湾の国立公共資訊図書館「読書ホームランププログラム」を事例として……………洪 敦明
図書館からスタジアムへ，スタジアムから図書館へ「サッカー」リーグチームとのタイアップ事例……………小池信彦，松永憲明，澤谷晃子，天野奈緒也
北海道日本ハムファイターズと北海道内図書館およびスポンサー企業とのタイアップ事例……………荒木龍史
鳥根県立図書館におけるタイアップ事業について……………大野 浩
熊本県の文化の礎として－県内文化施設とのタイアップについて……………山形あき子，青木道子
投稿
国立国会図書館におけるマイクロフィルム長期保存対策……………吉井伶奈
日本統治時代台湾における官立図書館の歴史的意義に関する一考察……………井上敏孝

・Vol.63 No.1 (2025年3月刊行)

特集：図書館による出版活動

- 紀要は郷土愛のために－『南葵音楽文庫紀要』の使命
.....美山良夫
- 『大阪府立図書館紀要』の発行について
.....大阪府立図書館紀要編集委員会
- 『早稲田大学図書館紀要』の来歴と意義－図書館職員に
身近な研究成果発表の場として.....稲葉直也
- 明治大学図書館紀要『図書の譜』の刊行について
.....折戸晶子
- 分配者から協働生産者へ－新たな知識のエコノミーに
向けた機関リポジトリOUKAの実験
.....神崎隼人, 甲斐尚人
- 自主学习グループによるオープン化活動－「ししょま
ろはん」の活動内容と情報発信.....きたむらきよこ
- 公立図書館が刊行する紀要類の現況.....南波佐間望

図書館雑誌／12月号予告 (Vol.119 No.12) 特別定価1362円 12月20日発行予定

特集：学校図書館アラカルト 学校図書館のこれからを考える(仮題) 予定内容＝日本子どもの本研究会「ヤングアダルト&アートブックス研究会」の活動(岩井路加), 戦う米国の学校図書館員－禁書問題と学校図書館員の動向(井上靖代), 学校図書館ではじめる探究学習－学校図書館司書をパートナーに(浅見和寿), 統計とアンケートから見る学校司書の実態(JLA非正規雇用職員に関する委員会・学校図書館部会), 「朝の読書」の現在(押木和子), 高等学校「情報科」と場としての学校図書館への提案(中園長新), よい施設は対話から生まれる－茅野市立永明小学校中学校の事例から(溝口南), 学校図書館訪問記「茅野市立永明小学校中学校」(JLA学校図書館部会)。小特集：IFLAアスタナ大会レポート(三浦太郎, 鎌田均, 松本直樹, 長谷川幸代)。以上のほか, 〈ウチの図書館お宝紹介! ㊤小平市中央図書館〉平櫛田中文庫－好奇心あふれる彫刻家の本棚(柴田朋彦), 〈小規模図書館奮戦記㊤阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター資料室〉震災の経験と記憶を, 資料を通じて伝える(福嶋純之), 〈図書館で実践! SDGs㊤オーテピア高知図書館〉オーテピア高知図書館とSDGs－地域と未来につながる図書館活動(八田裕子), 〈れふぁれんす三題噺㊤東京学芸大学附属国際中等教育学校総合メディアセンター〉多様性を認め合う空間へ－東京学芸大学附属国際中等教育学校(渡邊有理子)等の連載のほか, 2025年度通算第3回(定時第3回)理事会議事録・資料, 本誌第119巻総索引を掲載して増ページでお届けいたします。

編集手帳

11月号は「高大連携における大学図書館の可能性」を特集しました。

学校図書館の側から「連携」というキーワードに注目すると、学校図書館法にも（第4条1項5号）、「他の学校の学校図書館，図書館，博物館，公民館等と緊密に連絡し，及び協力する」といった内容が規定されています。高等学校においては，すでに「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業」として、「総合的な探究の時間」が始まっていて，そ

れを支援するには，学校図書館の蔵書に限りがあることから，従来，学校図書館と公共図書館との連携事例は多くありました。しかし，学校図書館と大学図書館との連携に関しては，事例が少なく模索されてきたのが現状でしょう。高等学校の図書館にとって，特定領域における専門的な学術資源をもつ大学図書館への期待は大きく，地域的な高大連携が求められているといえます。

共通するキーワード「高大連携」に関する論考が寄せられています。

まず，総論として小野氏から，高大連携における大学図書館の教育的価値についての論考。次に梅澤氏から，情報リテラシー教育の観点において，高大接続に寄与する大学図書館職員に求められるスキルに関する

論考。さらに，実践事例として4編寄せられています。大正大学からは，高大接続の理論的な枠組と高大連携の取り組みに関する具体的な事例について。筑波大学附属駒場中・高等学校から，大学附属図書館のサポート体制と附属駒場中・高等学校との協働・実践の事例。清教学園中・高等学校からは，学びの転換期に図書館はどう立ち会うか，という視点から，中学生が執筆する「卒業論文なんでやねん」の実践に関する事例。専修大学図書館からは，高校生を対象とした「司書インターンシップ」の具体的な実践事例。

大学図書館界の高大連携（接続）という視点と可能性が，高等教育における次世代の展望につながっていくよう願っています。（中村保彦）

事務局カレンダー

*○印の日が事務局のお休みです。

2025年11月

日	月	火	水	木	金	土
*	*	*	*	*	*	①
②	③	4	5	6	7	⑧
⑨	10	11	12	13	14	⑮
⑯	17	18	19	20	21	⑳
㉓ ㉒	㉔	25	26	27	28	㉙

2025年12月

日	月	火	水	木	金	土
*	1	2	3	4	5	⑥
⑦	8	9	10	11	12	⑬
⑭	15	16	17	18	19	⑳
㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗
㉘	㉙	㊿	㊿	*	*	*

※事務局の仕事納めは12月26日(金)です。